

麻江型銅鼓の源流と展開

宮川 禎 一

一、はじめに

中国南部の貴州省や広西壮族自治区の山岳地帯に居住する壮族や布依族・水族・苗族・瑶族・彝族・侗族などの諸民族の間では現在でもなお銅鼓を使用する祭祀がおこなわれているという(挿図1の分布図参照)。そこで用いられている銅鼓はF・ヘーゲルの分類で「第IV型式」、中国の研究者が「麻江型」と呼ぶものである。麻江型の名称は貴州省麻江県の古墓から出土した銅鼓に由来している。以下本稿では便宜的に麻江型という型式名を使用して記述を進める。麻江型は銅鼓としては比較的新しい段階のもので、中国の研究者によるとその製作時期は宋代から清代にかけてとされる。

現在の銅鼓研究の傾向は、主に先第I型式(万家壩型)から第I型式(石寨山型・冷水冲型)にかけての古い銅鼓を中心に、その起源と用途・祭儀・描かれた絵画の意味などに集中しており、麻江型(第IV型式)に関する研究は充分とは言えない。麻江型銅鼓は中国の博物館に収蔵されているものだけで千点近くあるうえに文様が単

調なものであって興味もたれにくかったのであろう。また中国において一応編年的な検討も行われているが、その変遷過程は充分に理解・整理されているとは言えない。

日本には古く江戸時代にこの麻江型銅鼓がもたらされている^①。現在、博物館や大学・個人が所蔵する麻江型銅鼓は三〇点を越える^②とみられる。しかしこの型式の銅鼓に関する考古学的な研究としては明治四〇年代の鳥居龍藏の報告^③や、昭和初期の中山平次郎・直良信夫^④による個別資料の報告がある程度で、まことに少数である。一方近年中国南部の少数民族居住地域での民族学的な調査レポートなどでは銅鼓使用例の記述が見られるようになってきた。また弥生時代の銅鐸祭祀の参考例として麻江型銅鼓の使用状況を参照する傾向も近年の銅鐸研究にはまみられる^⑤。しかしながら日本での麻江型銅鼓そのものに関する具体的な認識は極めて低いのも事実である。

筆者は前年に第III型式(西盟型)銅鼓に関してその特徴と変遷の概要を示した^⑥。本稿では引き続き西盟型銅鼓に並行する時期に主に中国南部で展開した麻江型銅鼓に関して資料を集めた。そして研究の第一段階として、日本国内所在の銅鼓の観察を基本に、中国博

物館所在の銅鼓やヨーロッパ所在の銅鼓など麻江型銅鼓の情報を集めて整理し、現在考えられる変遷の大筋を記述してみたい。

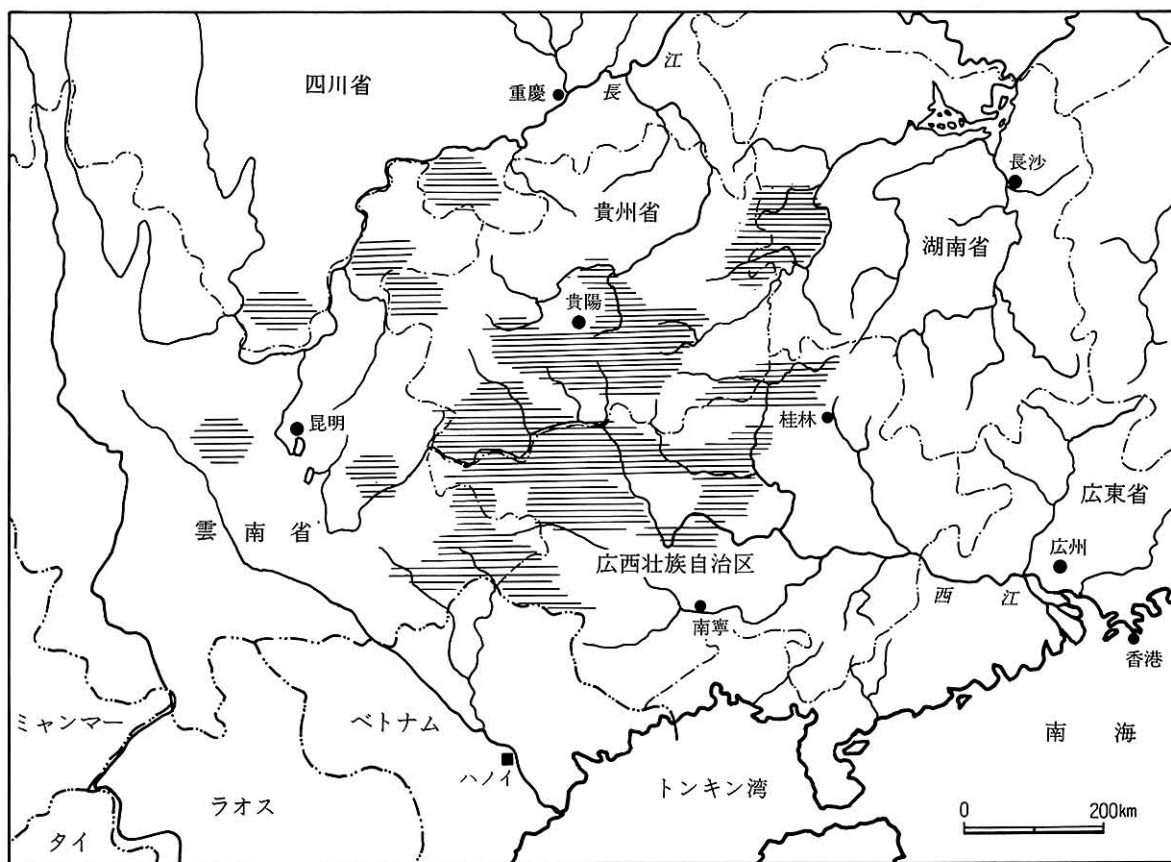
二、麻江型銅鼓の特徴

麻江型銅鼓の形状(挿図2)は円盤状の鼓面と筒状の側面からなるもので、鼓面は一面だけであり、底にあたる部分は抜けている。写真や実測図では鼓面を上向きになるように表現するが、実際に打ち鳴らす際には鼓面が垂直になるように、側面の把手に紐をかけて吊り下げて使用したことは民俗例から知られている(挿図20・21)。鼓面上の四個所に蛙像を付けた銅鼓をよく見るが、この麻江型に関しては原則として蛙像は付かない。

銅鼓の側面形は第I型式のように胸部・腰部・足部の三部分に分かれるのが基本であるが、麻江型銅鼓の場合は胸部と胴部がなだらかに続いており境界は明瞭でない。一方、側面中位には明瞭な突出部があり稜をなしている。もともとこの稜は足部の屈曲稜であるのでここから下だけを足部と呼ぶのは厳密には正しくないのだが、本稿では胸部と腰部を一体として胸部と呼び、胸部と足部とが稜で接しているということにして記述をすすめるのが良いと考える。つまり麻江型に限っては側面の上半を「胸部」、下半を「足部」と呼ぶことにしたい。

把手は胸部に縦方向に橋状に付くもので二本一組の把手が対称に配される。その外面には縄状の浮き彫り表現がある。把手は吊り下げた際に鼓面が垂直になるように重心を考慮して配置されている。

麻江型銅鼓のサイズは他型式の銅鼓とは異なり、著しく均一であ



挿図1 麻江型銅鼓の分布地域(『中国古代銅鼓』図71を改変)

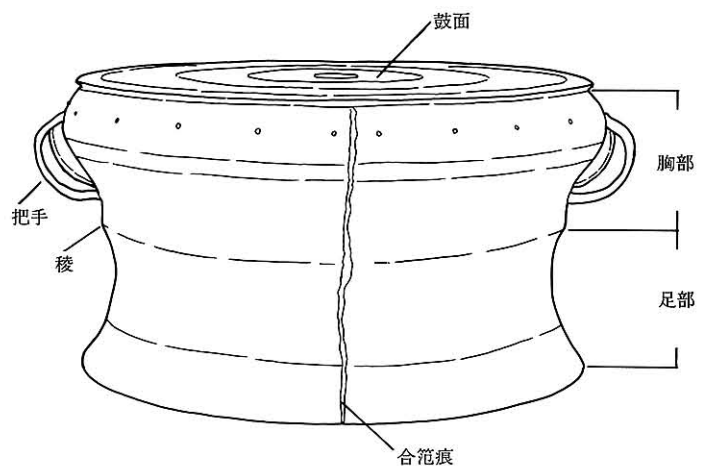
る。面径は四五〜五〇センチ、総高二五〜三〇センチの範囲に集中している。鼓身の厚さも三ミリ程度であり、総重量は一五キログラム前後にある。逆にいえばこの法量の範囲内に無いものは麻江型とは呼び難い。小型や大型の麻江型銅鼓というものは存在しない。

麻江型銅鼓では砂土製外型に対して文様原体（スタンプ）を押しつけて施文するのが原則である。したがって文様は単位文様の繰り返してあり、製品表面で凸文様（陽刻）となる。鼓面では圏線によって区切られた同心円状の文様帯を形成する。文様帯の数は中心部と最外縁を加えると八〜一二帯である。何番目の文様帯にどのような文様をいれるのかという文様配列には規則性があり、その単位文様の形状変化や配列の変化が時間差や系譜差を表しているらしい。

側面の文様は胸部と足部の二群に分かれているのが基本であり、正置した状態で水平方向にめぐる層状の文様帯をなす。鼓面に近い部分には珠文列が配され、足端部には三角形文が施されるなどある程度の配置の決まりがある。文様は鼓面と側面にのみあって、内面には無いのが普通である。ただまれに鼓面内側に村落風景等の絵画を陽铸したものがある。

文様は鑄型にスタンプ施文されるので異なる文様帯で同じ文様が用いられる例が普通である。例えば鼓面と側面あわせて二〇の文様帯があれば用いられたスタンプ原体は一〇種類というような具合である。また別個体の銅鼓に全く同じ文様が使用されていることが明らかかな銅鼓も存在する。またスタンプでなく「手描き」された文様もごく少数例に見られるが、新しい時期の銅鼓と推測される。

麻江型銅鼓の鑄造方法は、砂土製の中型（中子）を中心に分割された砂土製外型をくみあわせて鑄型を形成していると考えられる。

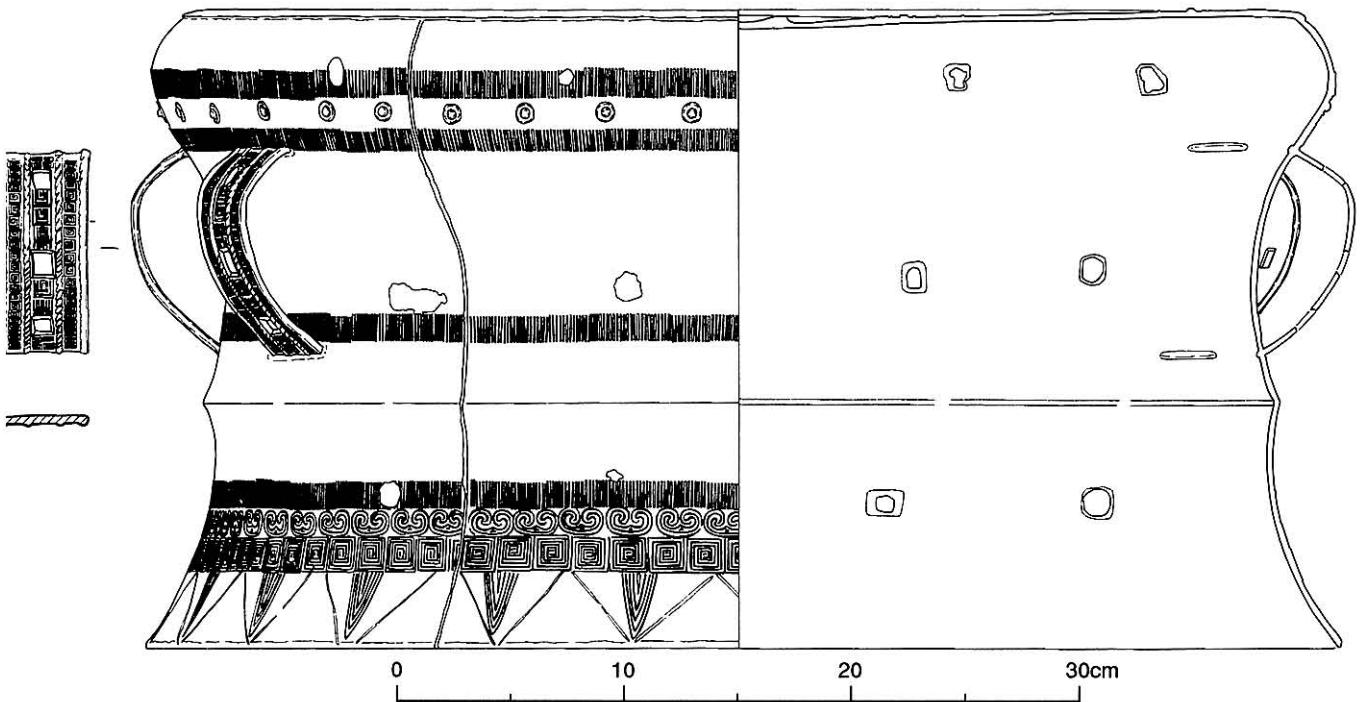


挿図2 麻江型銅鼓の細部名称

側面を縦方向にはしる鑄型のあわせめを示す甲張の跡がある。麻江型の場合、その数は四本であり、側面の鑄型が四分割されていたことが分かる。鑄型は内型一、側面外型四、鼓面外型一の計六個によって成っていたといえる。また側面に型持孔をもつ例がある。

三、個別資料の検討

次に麻江型銅鼓八点の鼓面拓本等と側面実測図および所在地・由来・法量・鼓面文様・側面文様・把手の特徴・鑄造の特徴などのデータ、そして各銅鼓の特徴の記述を見開きで掲載した。



挿図3 A 辰馬1号銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

A 辰馬1号銅鼓

所在地 兵庫県西宮市、財団法人辰馬考古資料館所蔵¹²⁾。

由来 出土地等不詳。昭和初期、辰馬悦藏購入2点の内1点。
法量 面径 五〇・〇センチ。

足径 五三・二センチ。

総高 二八・三センチ。

稜高 一〇・八センチ。

稜高／総高値 〇・三八。

重量 十五・九六キログラム。

鼓面 第1帯 十二光芒。芒間に鳥頭文、櫛歯状の尻飾り付。

第2帯 連続する雷文か。摩滅著。

第3帯 連珠文。珠文間は比較的広い。

第4帯 櫛歯文帯。

第5帯 内向きの山形文。実際は方形の雷文の二辺か。

第6帯 遊旗文。特殊な形状をとる。

第7帯 偏行唐草文。細密な表現である。

第8帯 飛鳥文＋髪飾文。

第9帯 鋸歯文。

第10帯 連珠文。周囲に渦文がからむ特殊な形状。

第11帯 櫛歯文帯。

第12帯 最外縁部。無文様。

側面 胸部文様帯 櫛歯文帯＋團円付連珠文＋櫛歯文帯。

中位文様帯 櫛歯文帯。中位文様帯をもつ例は稀。

足部文様帯 櫛歯文帯＋C字文＋雷文＋三角形文。

把手 板状で三ヶ所に方孔。細かい雷文を充填した細密なもの。

別鑄造の把手を外型に埋め込んで本体を鑄造した痕跡。

状態 黒褐色。摩耗による光沢有り。

鑄造 側面外型はX字分割。側面には型持孔多数。

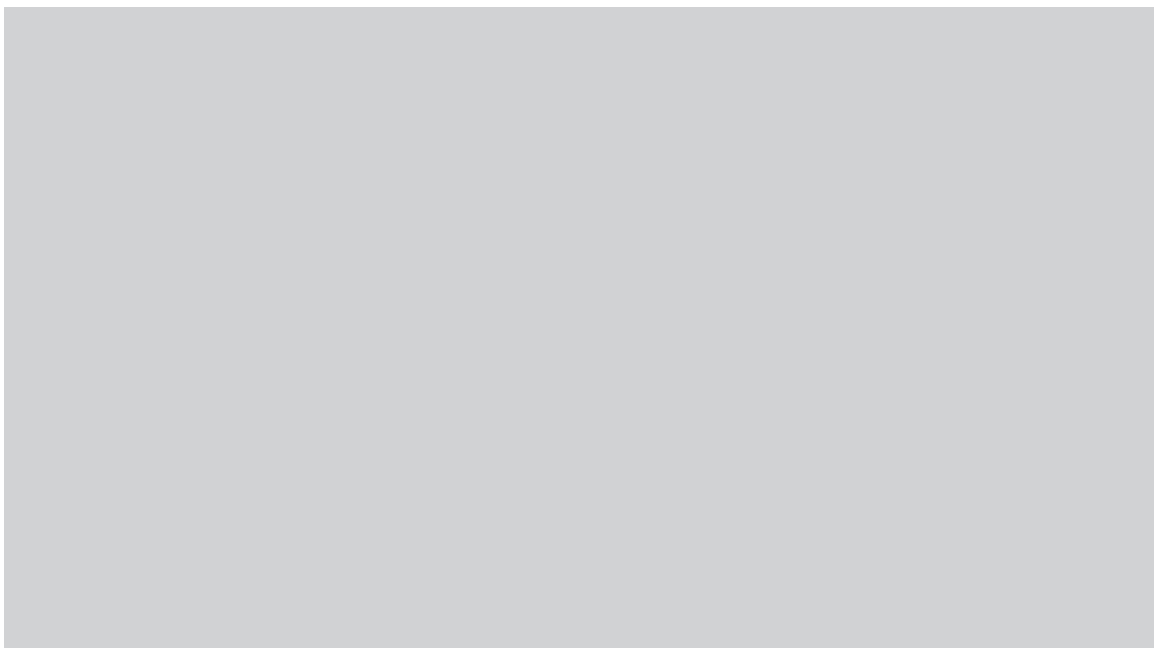
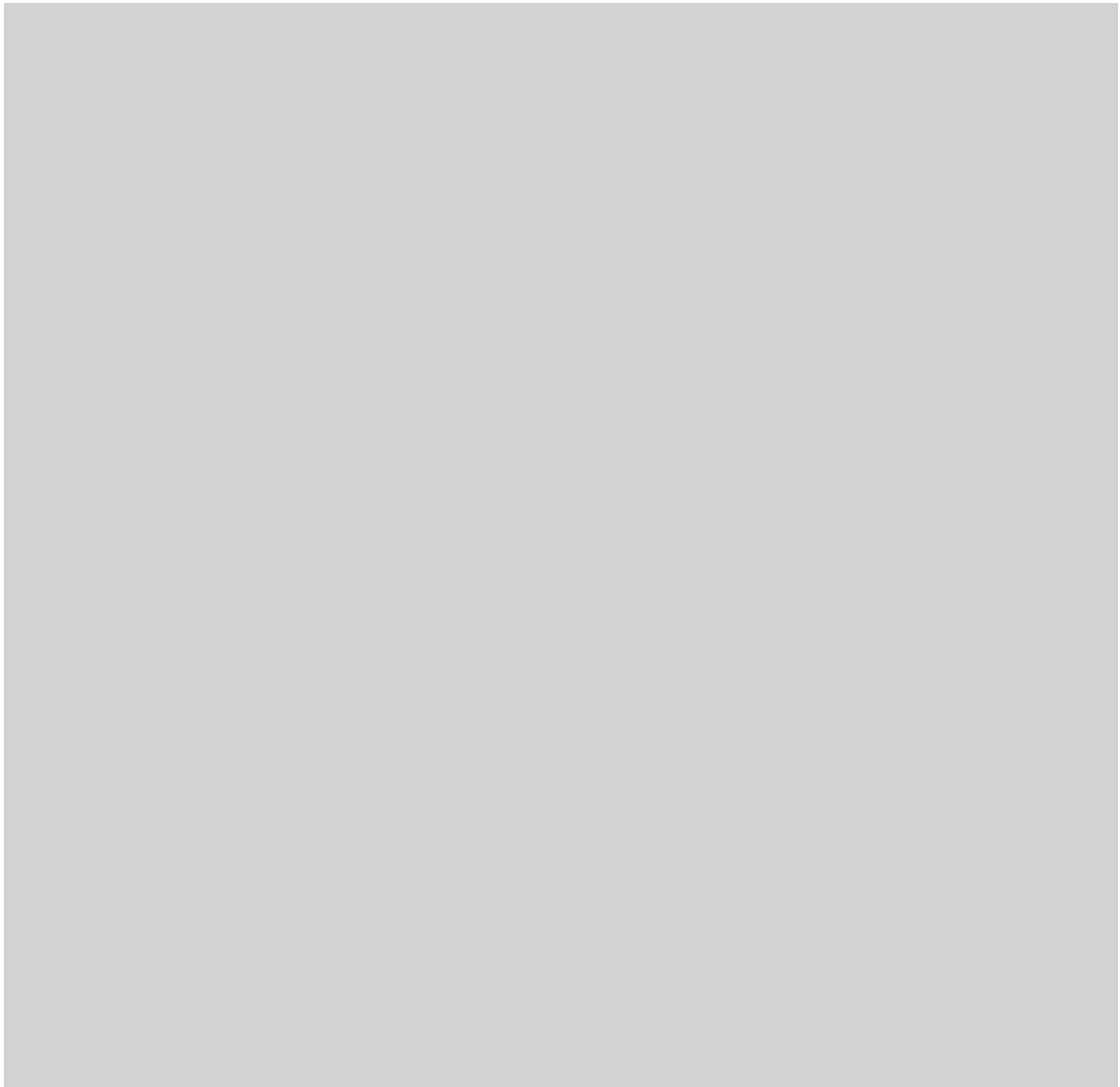
類例 類例を見ない。側面形はウイン1号鼓に類似。

この辰馬1号銅鼓は他の麻江型には見られない特徴を様々に備えているが麻江型銅鼓の極めて古い段階に属するためであろう。

側面の稜の位置は麻江型銅鼓ではほぼ真中あたりにあるのに本例ではかなり下にある。稜高を総高で割った値も〇・三八と低い。鼓面端が横へ突出しないことや胸部の最大径が高い位置にあり胴部と呼べるような広い中位をもっていることも他の麻江型とは異なる。

鼓面の文様では中心部から最外縁まで11本の圏線で12帯に分割する点では典型的な麻江型銅鼓の原則どおりだが、その文様配列と内容は特異である。第1帯の芒間の鳥頭文は櫛歯状の尻飾りが非常に長いこと。第6帯の遊旗文は台形の型枠を持たず古い冷水冲型銅鼓の遊旗文に類似していること。第8帯の飛鳥文＋髪飾文も他の麻江型には全く例がなく、冷水冲型などの古い銅鼓諸型式の名残と見られること。第10帯の連珠文は周囲に渦文が絡む特殊な形状だが他の麻江型では見られず、これも古い銅鼓諸型式に類例をもつことなどである。その他の単位文様も辰馬2号鼓などの麻江型典型の銅鼓と比較すると定型化していないと言える。側面中位に文様帯をもつことも通例とは異なる。また把手の文様が細密な点も古さを表す。

では辰馬1号鼓は本当は麻江型銅鼓ではなく、先行する「遵義型銅鼓」ではないかと問われれば、法量や把手の形状、鑄造技術などから麻江型の範疇に入れざるを得ないと答えない。麻江型銅鼓の最古形のひとつとみなす。



挿図4 B ウィーン1号銅鼓 Franz Heger: METALLTROMMELN, Tafel 24

B ウィーン1号銅鼓

所在地 オーストリア、ウィーン王宮博物館所蔵。

由来 雲南省。ヘーガー註1文献¹³⁾の図版二四掲載。

法量 面径 四九・八センチ。

足径 五一・五センチ。

総高 二九・〇センチ。

稜高 不明。

稜高／総高値 〇・四五(写真よりの概算)。

重量 一一・八キログラム。

鼓面 第1帯 十二光芒。芒間に鳥頭文、櫛歯状の短い尻飾り。

第2帯 入り組み工字文の連続施文。特徴的。

第3帯 Z字唐草文。表現は細密である。

第4帯 連珠文帯。比較的密に施される。

第5帯 櫛歯文帯。

第6帯 遊旗文。主文様である。

第7帯 文様無し。

第8帯 文様無し。

第9帯 櫛歯文帯。

第10帯 連珠文帯。

第11帯 C字唐草文。表現は細密である。

第12帯 最外縁部。無文様。四方向に線状の隆起か。

側面 胸部文様帯 連珠文+唐草文+唐草文+唐草文+唐草文。

中位文様帯 櫛歯文+唐草文+櫛歯文。

足部文様帯 雷文+唐草文+雷文+三角形文。

把手 板状。比較的丁寧か。細部は不明。

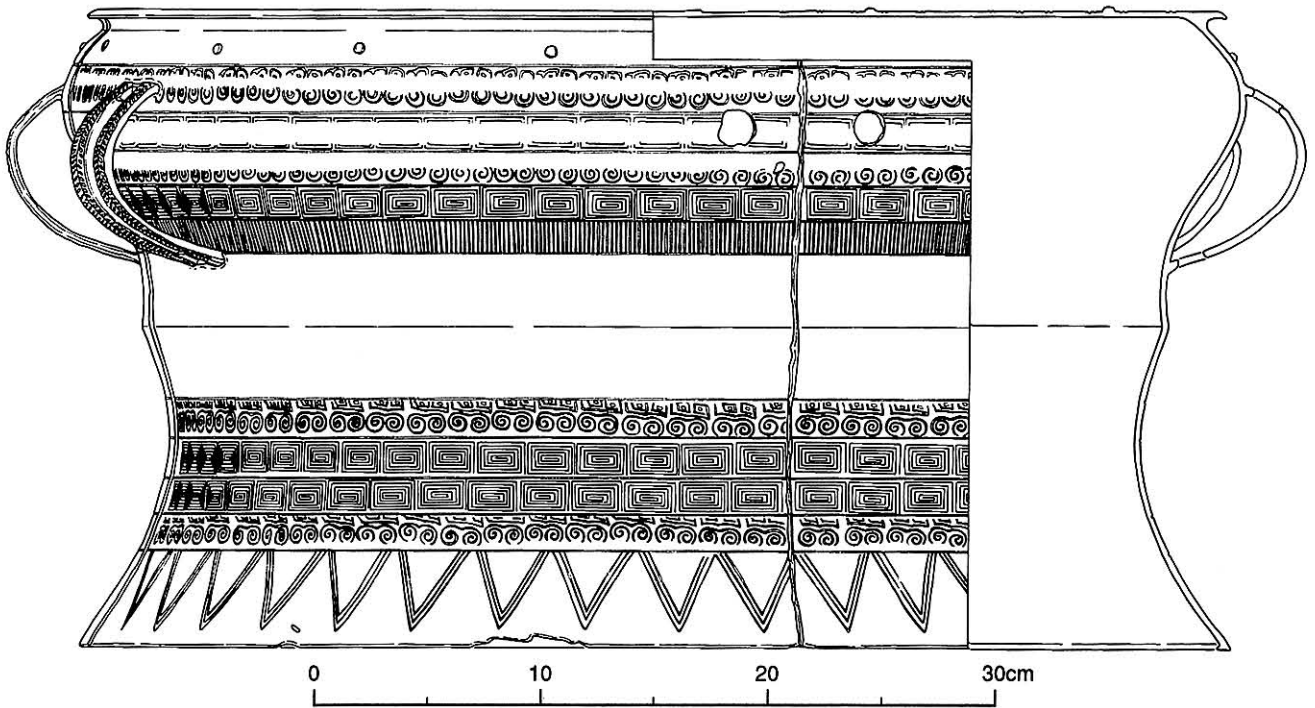
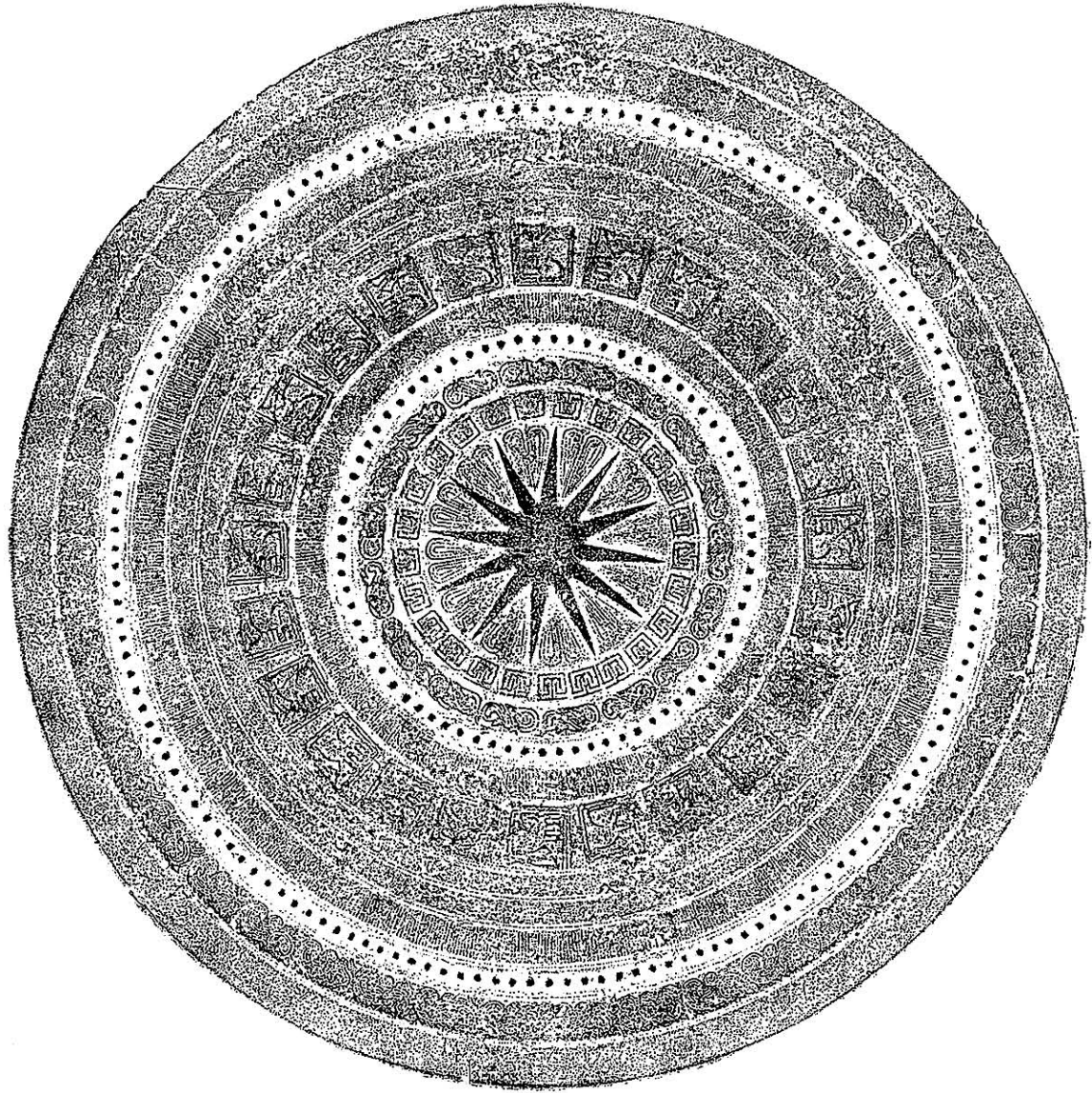
状態 写真でみる限り鏽や荒れの少ない良好な保存状態。

鑄造 側面外型は十字分割。型持孔は見えない。

類例 麻江型古典。文様内容は四川大学歴史博物館¹⁴⁾に類似。

ウィーン1号銅鼓は鼓面と胸部の境界の形状や側面断面形に前述の辰馬1号銅鼓に似た部分があり近い時期のものと考えられる。そして本例こそ辰馬1号鼓などの少数例を除く大多数の麻江型銅鼓の「始祖」となった非常に重要な銅鼓と言える。

鼓面文様は12帯に区分され、その文様配置は典型的。個々の文様は非常に細密で施文も丁寧である。その文様の内でも次の2点が古い要素として挙げられる。まず第2帯の入り組み工字文だが通常の麻江型では個々の文様が独立しているのに対し本例では連続する文様帯を形成するために隣接する文様相互が線を重ねるように押捺されている(挿図II参照)。その意味で通常の独立した入り組み工字文の祖形を示すとともにそれらよりも先行することが明白である。また第6帯の遊旗文は辰馬1号鼓のような大型ではなく台形の枠に入った通常の遊旗文のように見える。しかしこの遊旗文にしても正確な台形ではなく左肩の上端がわずかに盛り上がっている。この特徴をもつ遊旗文は他に少なく、定型的な遊旗文でも古い形を示すと考えられる。また辰馬1号鼓は12帯すべてを文様で埋めているがこのウィーン1号鼓をモデルとする典型的な鼓面配置の一群では第7・8帯を文様を入れない空白部とするのが大原則である。これは本来、飛鳥文や髪飾文といった文様を入れるべき場所として意識的に空白とされていた部分と解釈できる。その意識が守られる段階を古い段階に、なぜ空白部なのかを忘れて他の文様を埋めていったものを新しい段階として区分することが可能であろう。



挿図5 C 辰馬2号銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

C 辰馬2号銅鼓

所在地 兵庫県西宮市 財団法人辰馬考古資料館所蔵。

由来 不明。辰馬悦藏購入2点の内1点。

法量 面径 五〇・三センチ。

足径 五〇・八センチ。

総高 二八・二センチ。

稜高 一四・三センチ。

稜高／総高値 〇・五一。

重量 一五・八八キログラム。

鼓面 第1帯 十二光芒。芒間に鳥頭文、尻飾り無し。

第2帯 入り組み工字文。

第3帯 Z字唐草文。表現はやや簡略。

第4帯 連珠文帯。比較的密に施される。

第5帯 櫛歯文帯。

第6帯 遊旗文。外枠は台形。

第7帯 文様無し。

第8帯 文様無し。

第9帯 櫛歯文帯。

第10帯 連珠文帯。

第11帯 C字唐草文。表現は細密。

第12帯 最外縁部。無文様。

側面 胸部文様帯 連珠文＋雷文＋双頭渦文＋雷文＋櫛歯文。

足部文様帯 双頭渦文＋雷文＋雷文＋双頭渦文＋三角形文。

把手 板状。左右に綾杉状の裝飾。上下に方孔。

状態 全体は黒みをおび、青緑色の銹が被う。鑄肌の荒れ。

鑄造 側面外型は十字分割。胸部に型持孔。

類例 麻江型の「典型鼓」として類例多数有り。鳥居龍藏採集銅

鼓。東京芸大銅鼓。耕三寺銅鼓他。

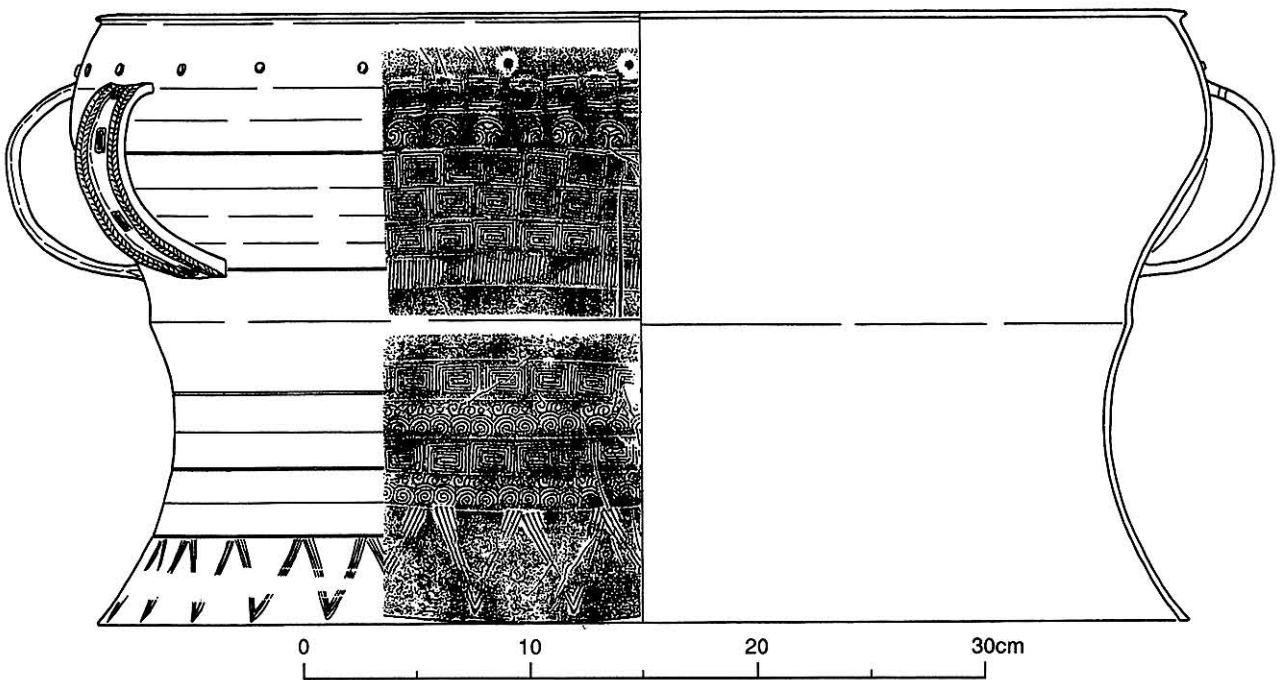
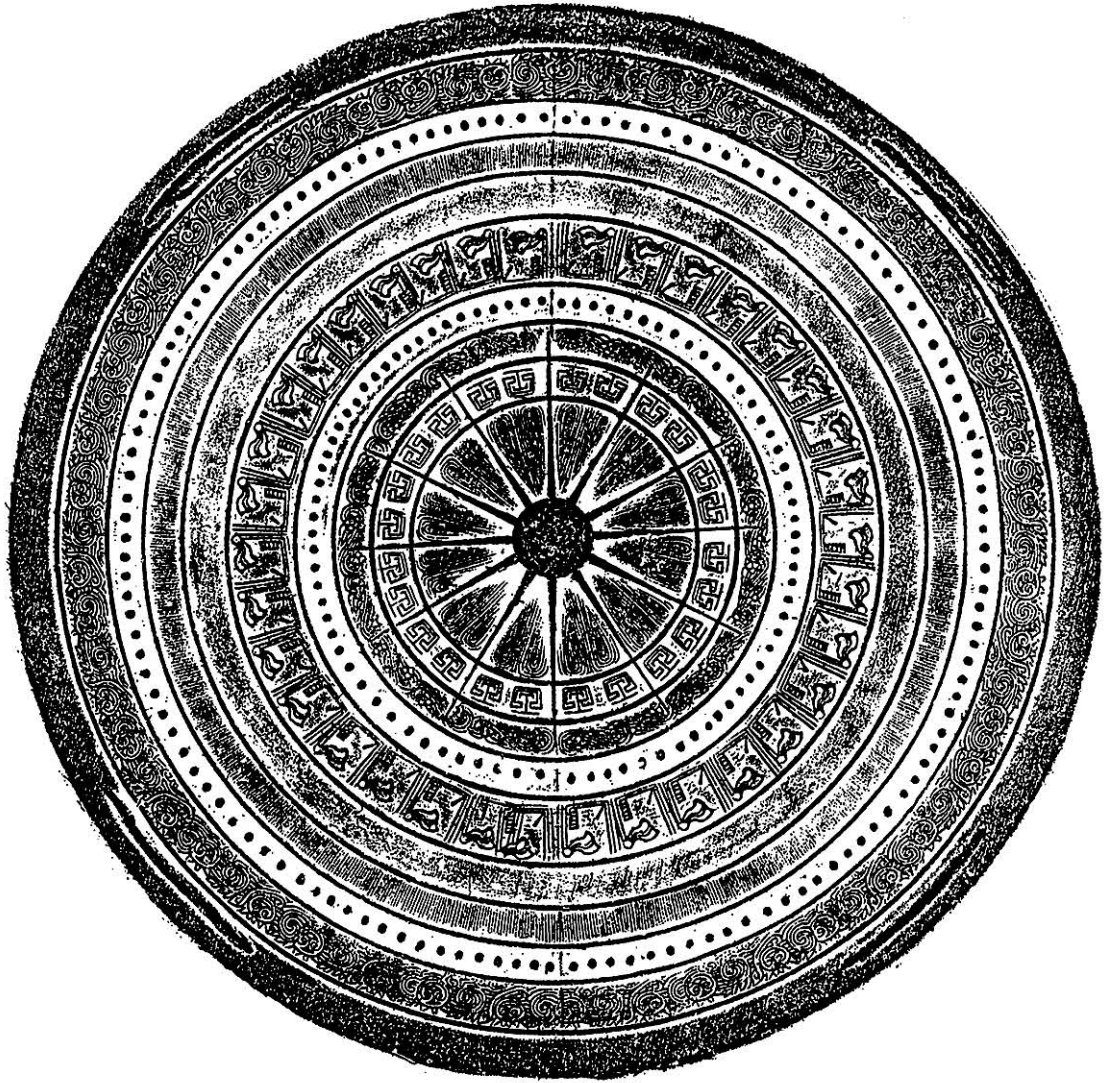
辰馬2号銅鼓は文様がやや見えづらいが鼓面12帯の文様は麻江型の典型的な形状を採っており類例が多い。文様構成はウイン1号銅鼓を踏襲しているものの単位文様にはやや新しい傾向が見える。

まず中心部の鳥頭文は水滴を並列した形状で尻飾りの櫛歯文の無い簡素な形である。この辰馬2号鼓（典型鼓）以降の鳥頭文は尻飾りを持たないのが大勢である。第2帯の入り組み工字文は個々に独立したものであり（挿図11）、ウイン1号鼓の連続文様とは性格が変化している。したがってそれより新しいものである。

第6帯の遊旗文は一般的な形状で、外枠が左右対称の台形を成している点でウイン1号鼓とは異なる。後述の諸銅鼓と比較すれば辰馬2号鼓のそれが普通であることが分かる。遊旗文は本来第I型式の銅鼓に見られる羽人文の変化したものである（挿図12）が、この麻江型典型鼓では元の形が何であつたか分からない程に変形している。しかし麻江型において長期に渡ってこの不思議な形状が守られていることから単なる文様ではなくて何らかの「意味」があり、それを理解していたものと推測される。

側面の文様帯は中央部の稜をはさんで胸部と足部の上下2群に統合され中位文様帯は無くなっている。足端部の三角形文も三重線の単純なものに変化している。また側面の稜の位置が鼓面と足端のほぼ真中にあり、稜高／総高値が〇・五一と通常の麻江型によくある数値を示している。

麻江型銅鼓の典型例であり、相対的に古く位置付けられる。



挿図6 D 大阪個人蔵銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

D 大阪個人蔵銅鼓

所在地 大阪府貝塚市 個人所蔵。

由来 不明。大正〓昭和初期の購入品という。

法量 面径 四八・四センチ。

足径 四八・四センチ。

総高 二七・〇センチ。

稜高 一三・五センチ。

稜高／総高値 〇・五〇。

重量 不明。

鼓面 第1帯 十二光芒。芒先は第3帯まで延びる。鳥頭文。

第2帯 入り組み工字文。

第3帯 Z字唐草文。やや細長い。

第4帯 連珠文帯。

第5帯 遊旗文。外枠は台形。

第6帯 文様無し。

第7帯 櫛歯文帯。

第8帯 連珠文帯。

第9帯 C字唐草文。表現は過剰。

第10帯 最外縁部。無文様。四方に長九センチの隆起線。

側面 胸部文様帯 珠文＋双頭渦文＋雷文三段＋櫛歯文。

足部文様帯 雷文＋唐草文＋雷文＋唐草文＋三角形文。

把手 板状。左右に綾杉状の裝飾。上下に方孔4個。

状態 暗緑色。鏽。

鑄造 側面外型はX字分割。型持孔は無い。

類例 長光芒の資料で類例多数。

本例は鼓面中心の太陽文の光芒が長く延びて第2・3帯に貫通する「長光芒」と呼べるグループの代表のひとつである。面径や総高が辰馬2号鼓などよりやや小さいのは注意される。

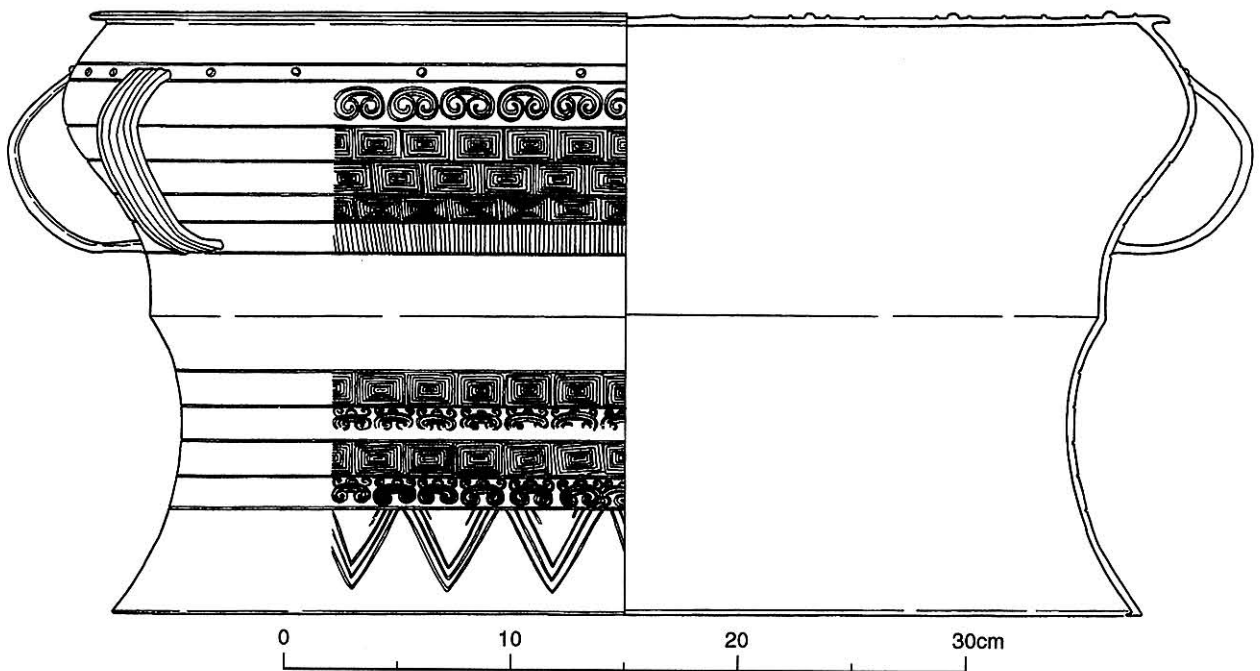
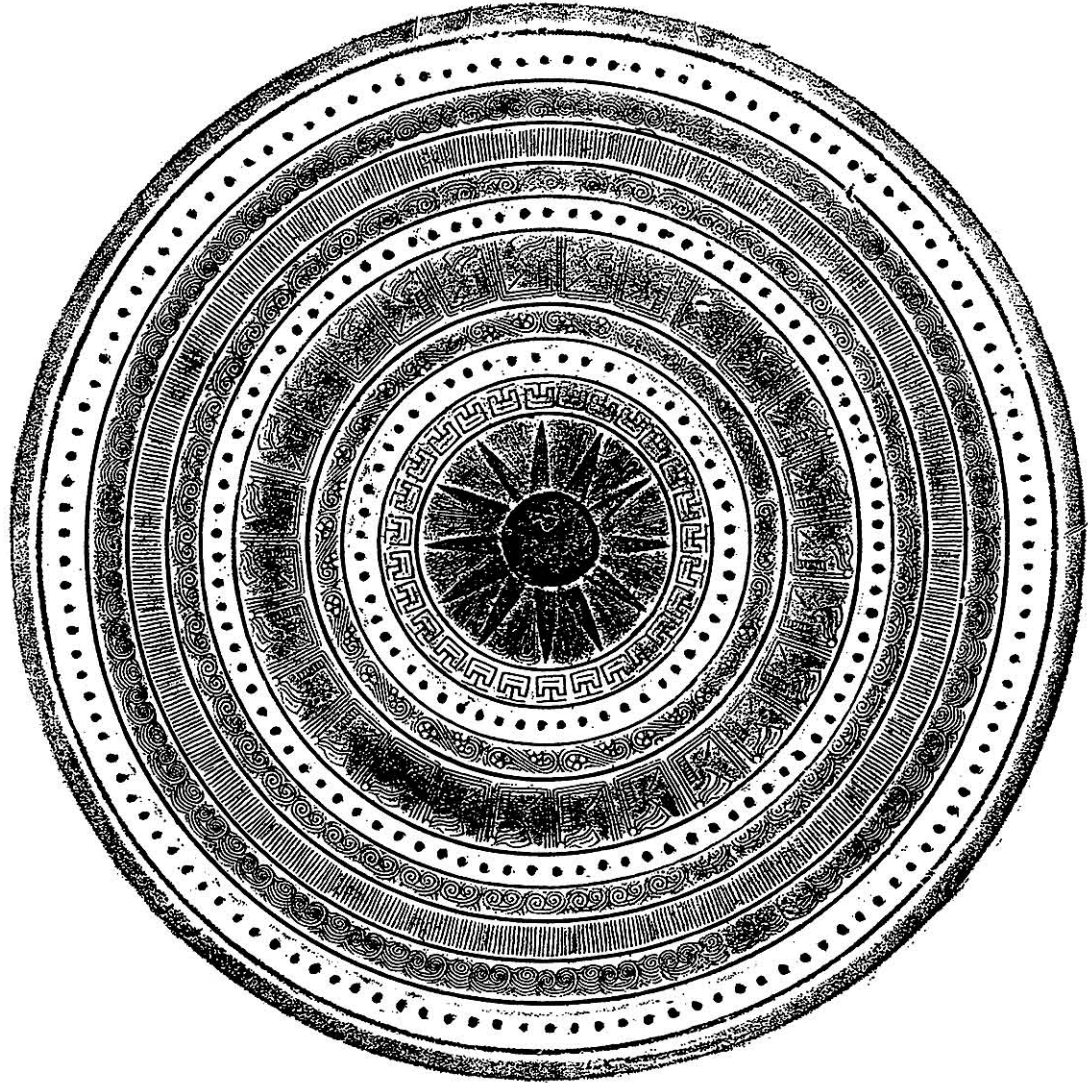
文様は一見して典型鼓に近い。しかし鼓面の文様帯は典型鼓の12帯構成ではなく2帯少ない10帯構成をとっている。通常第5帯に有るべき櫛歯文帯が省略され、無文様帯が二帯から一帯に減っているためである。Z字唐草とC字唐草は細密さは失われていないが、やや変形している。単位文様はそれぞれ明瞭に表現されていて分かり易い。側面形は麻江型では一般的で、稜もほぼ中位にある。

最外縁部の四方に見られる線状隆起はこの「長光芒」グループによく見られるものである。本例では側面鑄型の合わせ目の上の4ヶ所に存在しているので鑄型の組立に係わる現象であろう。製作工房の系譜を知ることのできる特徴として注目される。

本例に酷似した資料としてはヘーゲルのあげたウィーン8号鼓（註一図版二六）を指摘できる。文様配置や側面形は極めて良く似ている。また単位文様も類似が著しい。遊旗文やC字唐草は酷似しているものの同一のスタンプを用いた文様かは判断できなかった。

さらに浅川滋男が報告した貴州省雷山県報徳郷郎徳上寨で苗族が使用している銅鼓⁵⁵とも非常に良く似ている。違いは遊旗文の旗が流れる方向が左右逆であるといった程度である。このように長光芒を特徴とする銅鼓の一群は非常に近似した特徴を共有しており、かなり生産量の多かった有力な工房の製品と推測することができる。

長光芒を特徴とする銅鼓には後述する「長光芒龍文鼓」や「長光芒内面絵画鼓」の群もあり系譜的な繋がりが考えられる。中心部太陽文が短光芒か長光芒かは見た目の区別が容易である。



挿図7 E 東大教養学部銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

E 東大教養学部銅鼓

所在地 東京都目黒区駒場 東京大学教養学部美術博物館所蔵。

由来 出土地等不明。三上次男採集。

法量 面径 四七・〇センチ。

足径 四四・七センチ。

総高 二六・五センチ。

稜高 一一・九センチ。

稜高／総高値 〇・四九。

重量 不明。

鼓面 第1帯 十二光芒。鳥頭文。

第2帯 入り組み工字文。

第3帯 連珠文帯。

第4帯 Z字唐草文。

第5帯 遊旗文。外枠は台形。

第6帯 連珠文帯。

第7帯 C字文。

第8帯 櫛歯文帯。

第9帯 C字唐草文。

第10帯 連珠文帯。

第11帯 最外縁。文様無し。狭い。

側面 胸部文様帯 珠文＋双頭渦文＋重格文三段＋櫛歯文。

足部文様帯 重格文＋唐草文＋重格文＋唐草文＋三角形文。

把手 板状。裝飾性に乏しい。

状態 黒褐色。光沢有り。側面稜部に塗布された赤色帯。

鑄造 側面外型は十字分割。型持孔は無い。

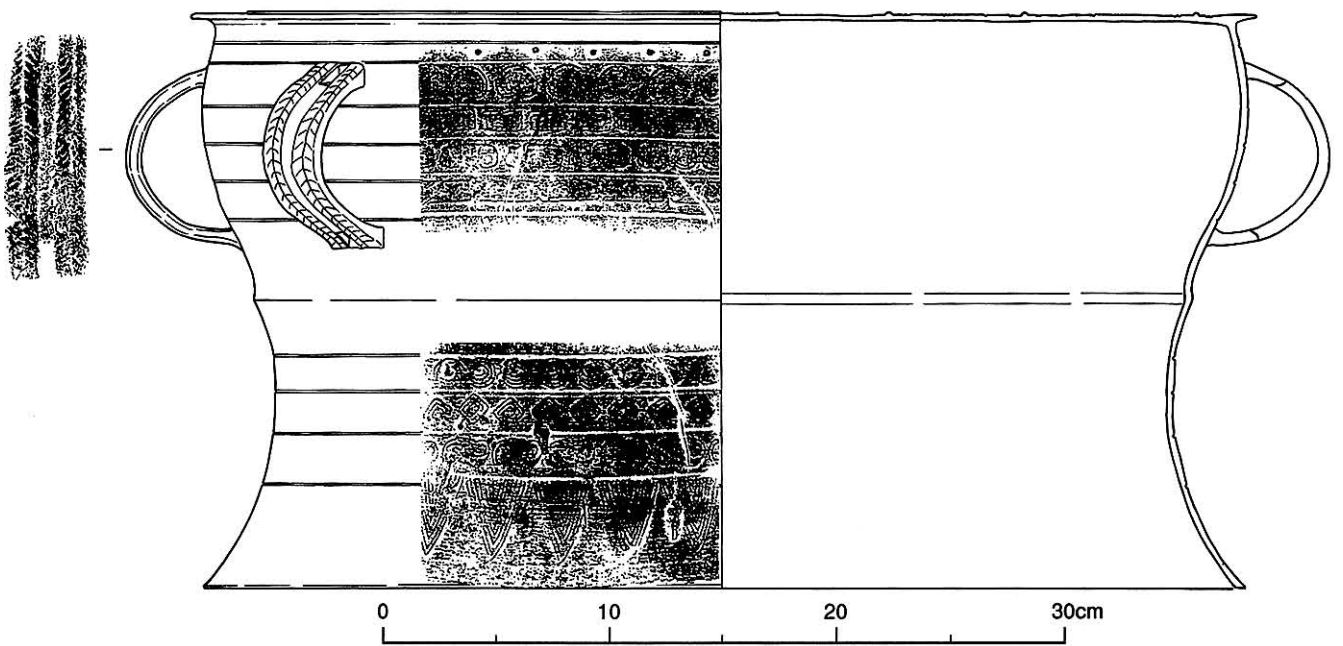
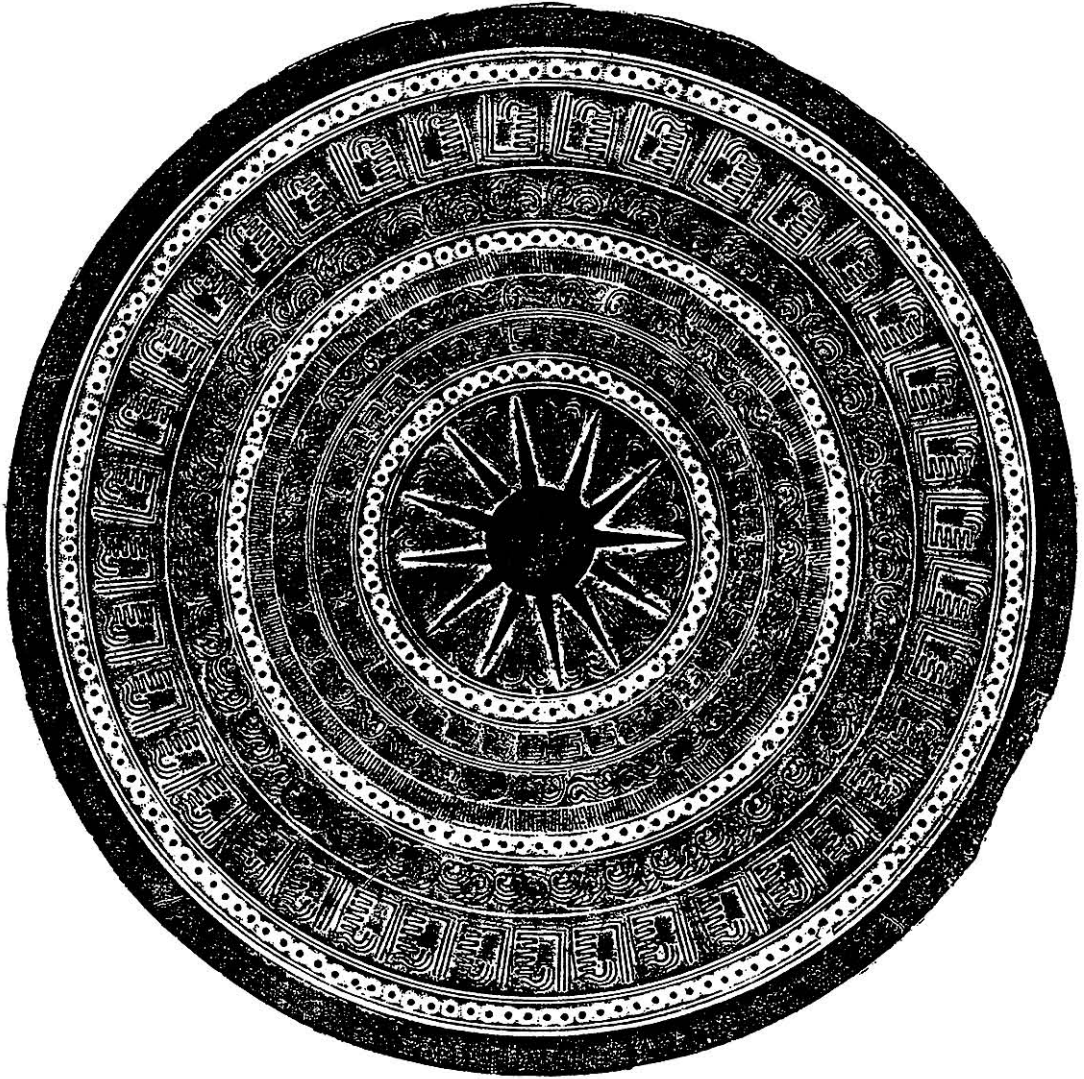
類例 連珠文帯を三列持つグループで類例は多い。

本例は鼓面に連珠文を三列配置する「珠文三列」の代表例のひとつである。鼓面全体は文様帯11帯で構成されるが、典型例にはあった無文様の空白帯を残さなくなり、最外縁を除いて全てを文様で埋めるに至ったと見られる。連珠文を三列配置する際に全体のバランスを考えてその位置を第3・6・10帯に置くことにしたために文様配列は典型鼓から離れてしまった。ウィーン1号鼓を始祖とする典型的な文様配列の意識が薄れた段階、つまり典型鼓より時期の降った段階に製作されたものとみなせる。

側面の文様配置は先に述べた「長光芒」の大阪個人蔵銅鼓(D)と雰囲気良く似ておりその近縁性・時期の近さを感じさせる。

その他の特徴としては、文様帯を区画する圏線が一般的なものより高く突出していること。第5帯の遊旗文の部分を除き、その他の文様帯は幅が良く似ていてめりはりに乏しい分割であること。太陽文の中心が円盤状に盛り上がり光芒との間に段差があること。使用される文様は基本的な麻江型の文様範囲を逸脱せず常識的なものがそろっていること。入り組み工字文が通常とは少し変わった形であること。把手の簡素化が進んでいること。鼓面最外縁は狭く隆起線は見られないこと。鼓面端部が外方へせりだしていること。胸部上半の張り出しが強いこと。稜の位置が側面のほぼ中程にあること。足端部の内面が内側へ少し尖っていることなどである。

連珠文を三帯に配列する銅鼓は数多く麻江型全体の三分の一以上を占めている。その文様配列は様々であり整理は難しいが、いずれも典型鼓よりは新しい時期の銅鼓とすることができよう。本例は「珠文三列」のグループの中では比較的古い方であろう。



挿図 8 F 南山大学銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

F 南山大学銅鼓

所在地 名古屋市昭和区 南山大学人類学博物館所蔵。

由来 出土地等不明。

法量 面径 四六・九センチ。

足径 四六・〇センチ。

総高 二五・五センチ。

稜高 一二・八センチ。

稜高／総高値 〇・五〇。

重量 一五・七キログラム。

鼓面 第1帯 十二光芒。鳥頭文。

第2帯 連珠文帯。比較的密。

第3帯 入り組み工字文。

第4帯 Z字唐草文。退化形。

第5帯 齒文帯。

第6帯 連珠文帯。

第7帯 C字唐草文。

第8帯 遊旗文。

第9帯 連珠文。

第10帯 最外縁。文様無し。

側面 胸部文様帯 珠文＋唐草文＋重格文＋唐草文＋唐草文＋重格文。

足部文様帯 渦文＋重格文＋唐草文＋三角形文。

把手 板状。左右に綾杉状裝飾。上下に方孔。

状態 黒褐色。光沢有り。銅質良好。

鑄造 側面外型は十字分割。型持孔は無い。

類例 連珠文帯を三列持つグループ。

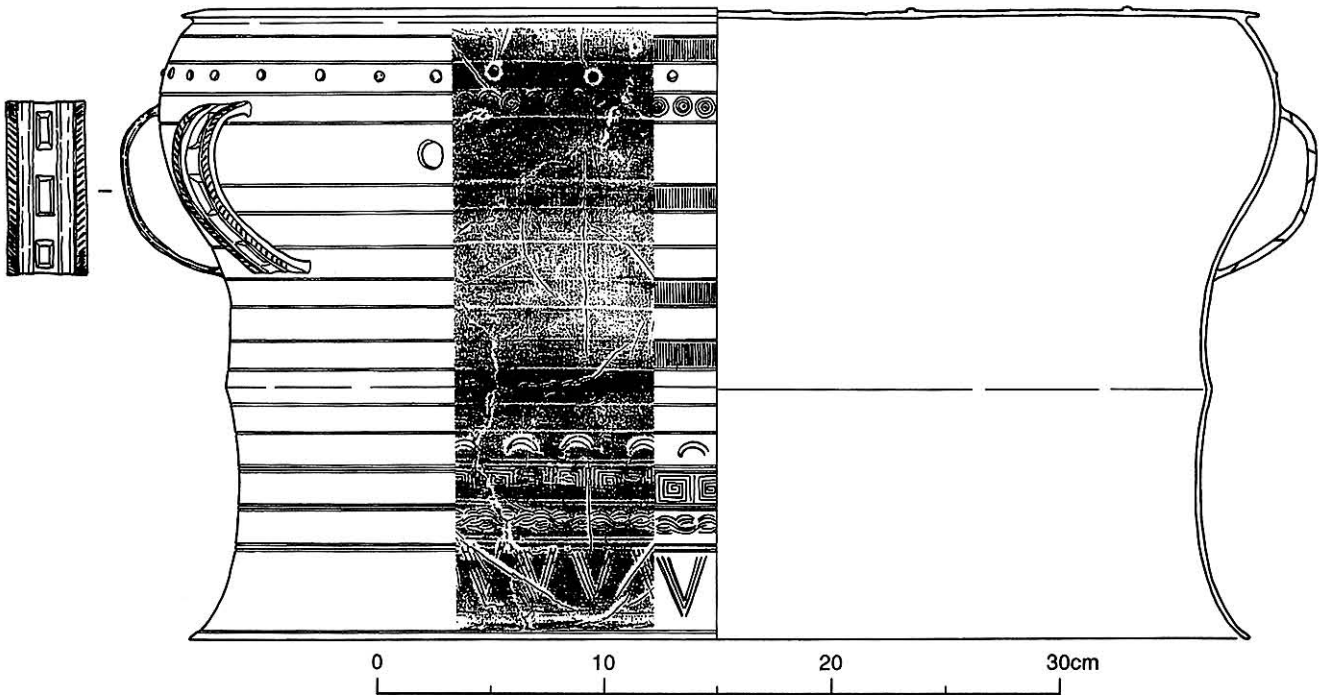
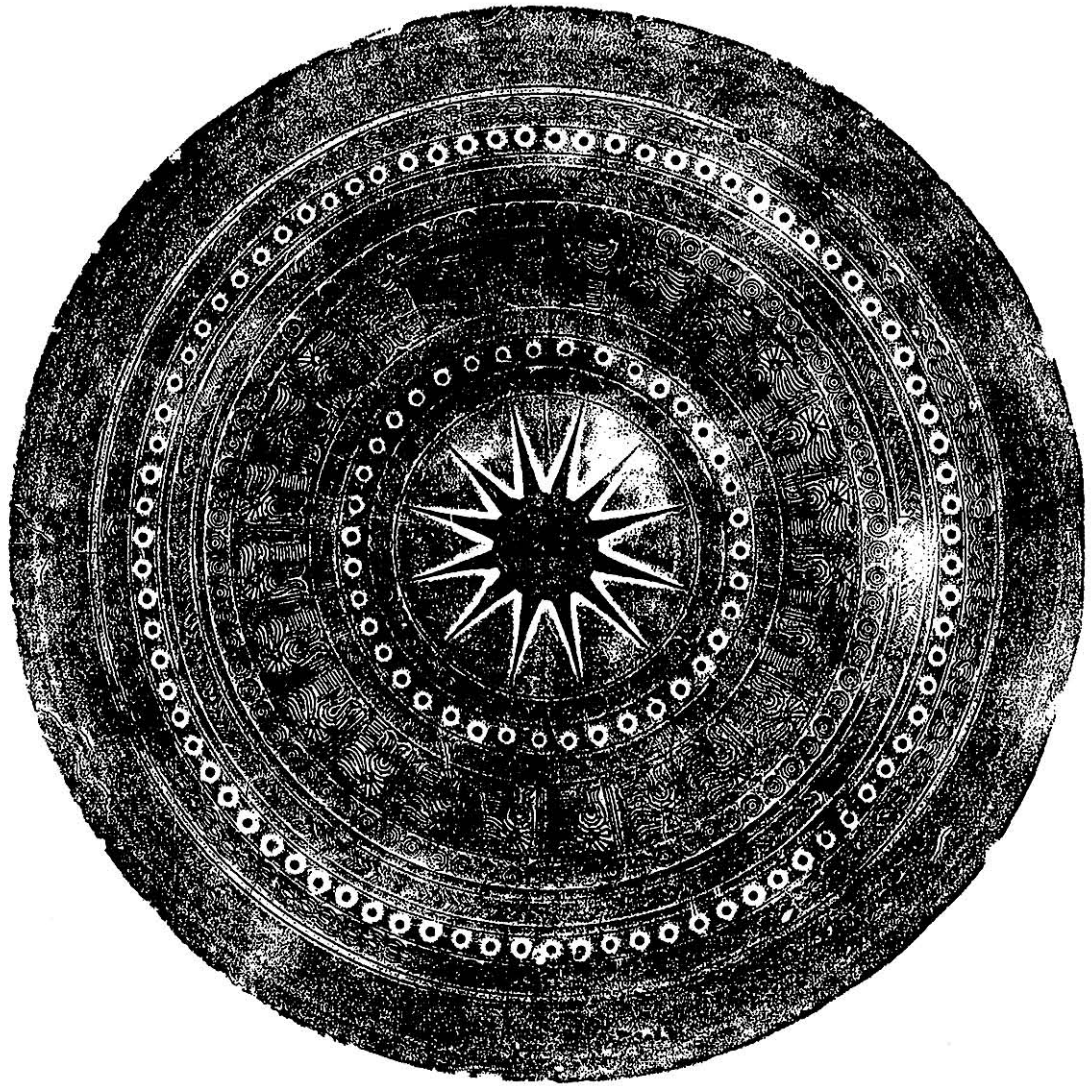
本例は東大教養学部銅鼓と同じく連珠文帯を三列配置する「珠文三列」の一例である。鼓面全体は文様帯10帯で構成される。無文様の空白帯を途中に入れない。最外縁を除き文様で埋めている。

一見した雰囲気は東大教養学部銅鼓(E)に似ているが文様の配列や形状には一層の退化傾向が看取できる。まず主文様たるべき遊旗文が外側の第8帯に追いやられている。そのうえ形状は簡略化が進んでいる。線は太く、二つ流れるはずの旗状表現がただの三本線で表現されている。円文の対角線上にあるべき線のとびだしも省略されている。遊旗文の末期的形状と言えよう。

また第3帯の入り組み工字文は通常の使われ方でなく上下が反転している。第4帯のZ字唐草文も伝統的なものと比べれば粗雑なものである。側面に施された文様も簡略化が進んでいる。足部文様帯では重格文を斜めに倒して施文しているが、このような現象も典型的な麻江型ではなかったことである。全体に文様規範からの逸脱が著しいと言わざるを得ない。

その他の特徴は、全体に小ぶりであること。太陽文の中心が円盤状でありこの点は東大教養鼓に似ていること。光芒の配置が不均等に見えること。文様帯の区画線が通常の凸線ではなく凹線であること。面最外縁が胸部上端より突出すること。側面の屈曲は比較的小さく、ややであること。胸部の張り出しは弱いことなどである。

特に鼓面文様帯の区画線が凹線であることは注目される。鼓面の外型を製作する際には凹線を描くためにコンパス状の施文具を回転させて区画線を描いたと推測されるが、製品で凸線となるのは比較的容易であるが、凹線となるためには特殊な工具・工夫が必要ならずである。どのような方法だったのであろうか。



挿図9 G 高知個人蔵銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

G 高知個人蔵銅鼓

所在地 高知市 個人所蔵。

由来 出土地等不明。購入品。

法量 面径 四七・二センチ。

足径 四六・六センチ。

総高 二七・六センチ。

稜高 一一・〇センチ。

稜高／総高値 〇・四〇。

重量 不明。

鼓面 第1帯 十二光芒。圏線内に収まる。芒間に文様無し。

第2帯 重圏文。

第3帯 連珠文。

第4帯 橢歯文。

第5帯 変形遊旗文。通常の遊旗文とは形状を異にする。

第6帯 重圏文。

第7帯 綾杉文。内外に細い無文様帯を挟む。

第8帯 連珠文。

第9帯 組紐文。その外に細い無文様帯を持つ。

第10帯 最外縁。文様無し。

側面 胸部文様帯 橢歯文＋珠文＋重圏文。

中位文様帯 橢歯文を三段。

足部文様帯 弧線文＋雷文＋組紐文＋三角形文。

把手 板状。左右に斜線状裝飾。上下に三つ方孔。

状態 黒褐色。光沢有り。

铸造 側面外型は十字分割。型持孔が有る。

類例 麻江型銅鼓の変遷本流からは外れた特殊なグループ。

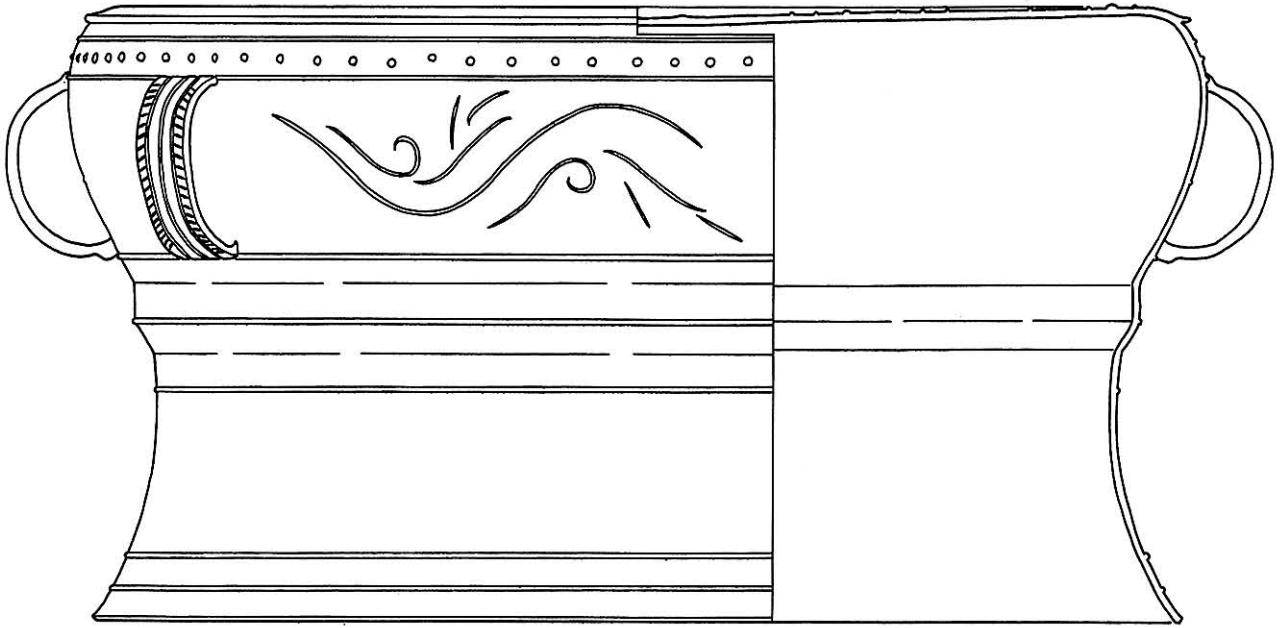
広西銅鼓図録二五八号鼓に類似。

本例は位置付けが難しい。側面形を見ると稜の位置が大変低く、稜高／総高値が〇・四〇となっている。この値は麻江型最古と考えられている辰馬1号銅鼓の値〇・三八に近く、稜の位置を重視すれば非常に古い段階のものと考えなければならぬ。また側面中位に文様帯を持つことも古い段階の銅鼓と共通する。

文様要素もウィーン1号銅鼓や辰馬2号銅鼓で整理された定型的な単位文様とはかけはなれていて特殊である。麻江型変遷の本流にあるものでは例えば南山大学銅鼓のように文様の形状は退化をみせていても、定型的な文様配列や文様形状の名残があるものである。しかし本例の文様は系譜が全く異なる言えるほど変わっている。まず入り組み工字文やZ字やC字の唐草文がその退化形ですら見られない。さらに遊旗文にしてもウィーン1号以来の台形枠を持つものではなく、本流には含まれない形である。この遊旗文は辰馬1号あるいは麻江型以前の古い型式の銅鼓に文様の原形を求めることができるかも知れない。この遊旗文については次に記す東大文学部銅鼓の変形遊旗文とのつながりも推測される。

類例には広西銅鼓図録の二五八号鼓が挙げられる。鼓面の文様配置や変形遊旗文などの単位文様は良く似ている。

これらの銅鼓をウィーン1号銅鼓以前の古いものと位置付けられるかと言えばそれは難しい。単位文様の中の組紐文や弧線文、足端部の三角形文をみれば粗雑で退化した文様であることが明白だからである。したがってこの高知個人蔵銅鼓などは麻江型銅鼓の変遷本流からは離れた特殊な系譜のものとして評価しておきたい。



0 10 20 30cm

挿図10 H 東大文学部銅鼓の鼓面と側面 S=3/10

H 東大文学部銅鼓

所在地 東京都文京区本郷 東京大学文学部列品室所蔵。

由来 出土地等不明。

法量 面径 四八・五センチ。

足径 四七・七センチ。

総高 二七・二センチ。

稜高 一三・〇センチ。

稜高／総高値 〇・四八。

重量 不明。

鼓面 第1帯 十二光芒。圏線内に収まる。退化した鳥頭文。

第2帯 珠文。

第3帯 珠文。

第4帯 複合鋸歯文帯。

第5帯 中心軸をもつ綾杉文帯。

第6帯 変形遊旗文。

第7帯 連続する偏行唐草文。

第8帯 連珠文。

第9帯 最外縁。文様無し。

側面 胸部文様帯 珠文+手描き唐草文。

足部文様帯 文様無し。

把手 板状。左右に斜線状裝飾。方孔無し。対をなす把手の付く位置が通常よりも離れているのが特徴。

状態 黒褐色。光沢有り。鼓面に鑄あがりの不鮮明な部分有り。

鑄造 側面外型は十字分割。湯回り不良による不整形の孔有り。

類例 文様を鑄型に手描きするグループ。

本例はその文様を鑄型に付ける際に通常のスタンプではなく篋状の工具で直接描いた手描き文様が主体となった銅鼓である。手描き文様が明瞭な部分としては第7帯の連続する偏行唐草文や側面胸部の唐草文が挙げられる。また変形遊旗文が手描きであることは、個々の文様を比較してみれば明らかである。型押しした文様は珠文だけで、残りはすべて手で描かれた文様と判断できる。文様構成は麻江型の基本形からは大きく離れている。第2・3帯の珠文は圏線を越えて3個で三角形を成すように配置されているが連珠文の原則を破ったものである。第4帯の鋸歯文も通常見られない。変形遊旗文は区画の中に適当に描いていったために拓本上の3時の位置の遊旗文は区画が間延びしてしまい植物のような文様を描き加えている。その外側の偏行唐草文も4時の位置あたりに文様の切れ目があるのでこの付近から時計回り（鑄型では反時計回り）に文様を描いていったものである。第8帯の連珠文は通常の連珠文に比べるとその配列が不均等で施工技术が拙劣であることを示している。鼓面の最外縁は幅が一定せず、拓本で右上が狭くなっている。

側面では胸部に手描き唐草を配するが、足部には全く文様を入れておらず異例である。側面の稜の位置はほぼ中位にあるが、自然な屈曲ではなく明確な「く」字状の隆起を形成しているのが特徴である。この点はこの銅鼓の断面形と比較すれば違いは明白である。

本例の最大の特徴は文様を篋などで手描きしていることであり、スタンプによる施文はほとんど用いられていない。このことは麻江型の基本形からは遠く離れていることを示しており、本例が時代の降る資料、あるいは系譜の分れた支流の銅鼓であろうことを推測させる。このような手描き鼓は麻江型銅鼓では少数派である。

四、遊旗文を中心とした諸要素の比較

次に八点の銅鼓をまとめて比較検討してみたい(挿図11)。

面径は五〇・三センチから四六・九センチの範囲にある。大きいものが古く、時期が降るとやや小さくなる傾向を看取できる。

筆者が注目している側面の稜の高さの問題だが、高知個人銅鼓の1例を除けば、辰馬1号銅鼓が低く、ウィーン1号銅鼓でやや高くなり典型鼓(辰馬2号)以降では〇・五〇、すなわち側面のほぼ真中に稜が来るようになった。稜が真中を越えて高い位置に来ている麻江型銅鼓は存在しない。一方稜の位置が中程より低いものは特別の考慮が必要な資料といえることができる。

鼓面文様帯の数についてだが、辰馬1号・ウィーン1号・辰馬2号は12帯であるが、それ以外は11帯以下に減少している。12帯構成を守るものと守らないものとに区分することができる。

「鳥頭文」辰馬1号銅鼓とウィーン1号銅鼓に楯歯状の尻飾りがあるが、辰馬2号銅鼓から南山大学銅鼓までは水滴文を並列しただけの形をとっている。東大文学部銅鼓にも尻飾りがある。

「遊旗文」麻江型の主文様は遊旗文である。ウィーン1号鼓から南山大学銅鼓までは麻江型で通常よくみられる形である。それに対して辰馬1号鼓では枠線をもたず古い伝統を引き継いだ形と言える。高知個人銅鼓や東大文学部銅鼓のそれは麻江型典型的の形状とは異なる系譜の文様であろう。

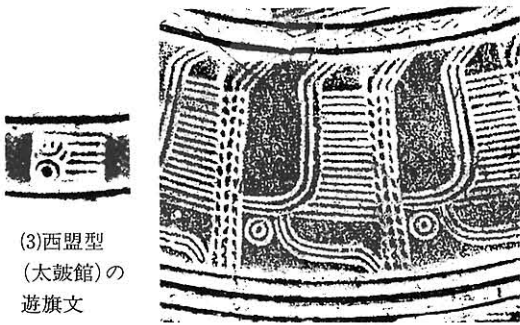
遊旗文は元々ヘーゲルの第I型式前半の銅鼓に見られる手に物を持ち頭に鳥の羽根飾りを付けた羽人文であった(挿図12の1)。第

	面径 cm	総高 cm	稜高/ 総高値	文様帯 数	鳥頭文	入組工字文	遊旗文	特記事項
辰馬1号鼓	50.0	28.3	0.38	12		不鮮明		飛鳥文+髪飾文あり
ウィーン1号鼓	49.8	29.0	0.45	12				定型最古型
辰馬2号鼓	50.3	28.2	0.51	12				典型的
大阪個人鼓	48.4	27.0	0.50	10				長光芒
東大教養鼓	47.0	26.5	0.49	11				珠文三列
南山大学鼓	46.9	25.5	0.50	10				珠文三列
高知個人鼓	47.2	27.6	0.40	10	—	—		特異な側面形
東大文学部鼓	48.5	27.2	0.48	9		—		手描き文様

挿図11 銅鼓諸要素の比較



(1)石寨山銅鼓形貯貝器の羽人文 (M12)



(2)冷水冲型(慶応大)の遊旗文

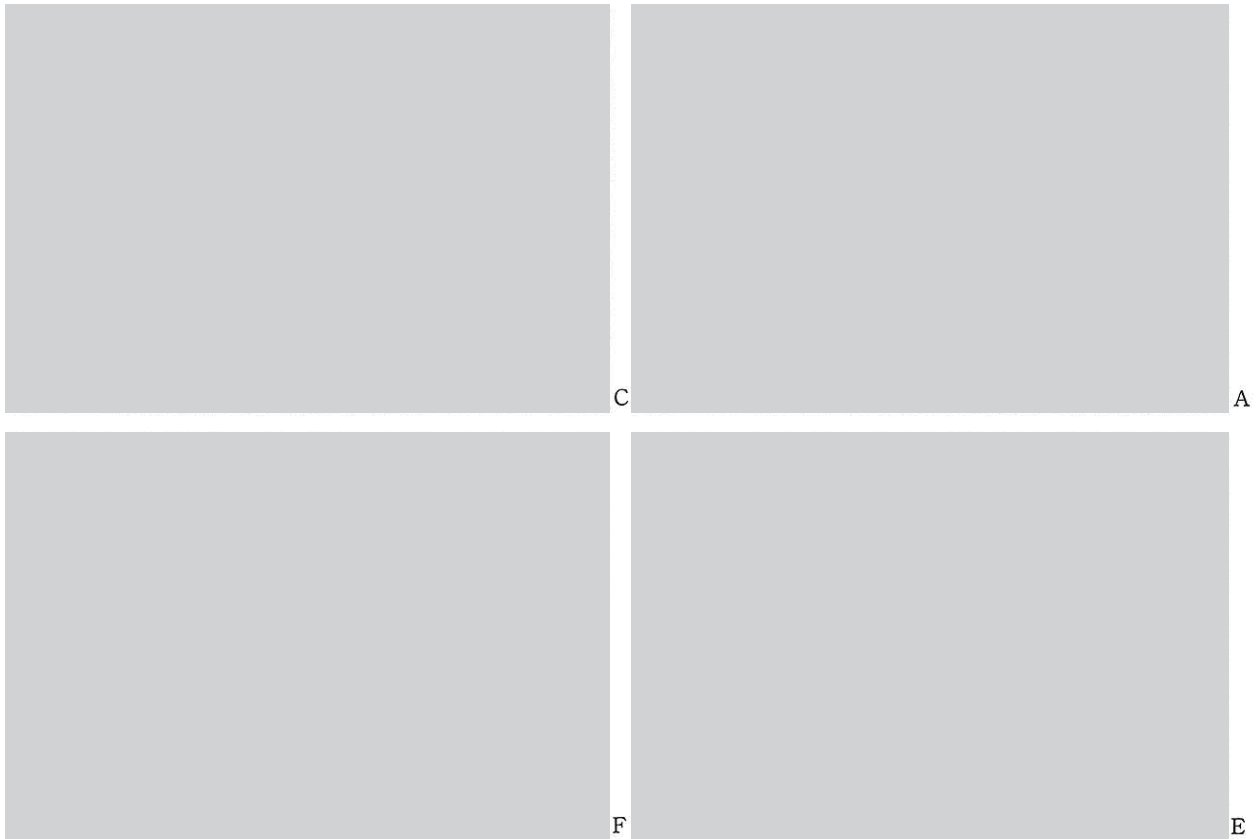


(3)西盟型
(太鼓館)の
遊旗文

挿図12 麻江型以外の羽人文・遊旗文

I型式前半(石寨山型)の銅鼓形貯貝器の羽人文¹⁵は具体的であり、意味は誰が見ても明らかである。しかし第I型式後半(冷水冲型)の銅鼓¹⁷ではすでに型式化していて人物像とは見えない形状となっている⁽²⁾。具体的な図像から抽象化された文様への変化が銅鼓全体の流れの比較的古い段階(第I型式のなかば)には起こったらしい。しかし遊旗文は単に装飾のためだけの文様ではなく、この形状に何らかの「意味」があったことはこの文様への強いこだわりから推測される。インドシナ半島山岳地帯に分布する第III型式(西盟型)銅鼓¹⁸でも遊旗文の名残が見られる⁽³⁾。

第IV型式である麻江型ではA・G・Hを除けば台形の外枠をもつ定型的な遊旗文が広く用いられた(挿図13)。この形の遊旗文を用いない麻江型銅鼓は文様のもつ「意味」が忘れさられた新しい段階の銅鼓と考えることができる。遊旗文の形状と使われ方を検討することは銅鼓の系譜を分析するうえで有効であろう。



挿図13 A・C・E・F各銅鼓に見られる遊旗文の写真

五、麻江型銅鼓の諸類型

麻江型銅鼓はその時間的・空間的広がりが大きく、直線的な変遷を遂げたとは考えにくい。広西壮族自治区と貴州省を中心として湖南省西部から四川省南部、雲南省の東部、そしておそらくベトナム北部辺境地域にかけての南北約八百キロ、東西約一千キロの範囲に分布し（挿図1）、製作年代は宋代から清代までの数百年にも渡り、作例も一万个を越えると思われるからである。おおまかな基本形は保ちながらも各地で流派を形成し、文様や細部形状の特徴を共有する銅鼓群を展開させたというのが実態であろう。

以下では既存の図録などから抜き出した鼓面文様の拓本を掲げ、その類型分けを試みてみたい。¹⁹

「典型鼓」(挿図14 i・j)

ウィーン1号(A)を始祖とし、辰馬2号(B)を代表例とした典型的な文様配置をもつ銅鼓の一群。鼓面は12帯構成。文様配置は①光芒間鳥頭文+②入り組み工字文+③Z字唐草文+④連珠文+⑤櫛齒文+⑥遊旗文+⑦無文様+⑧無文様+⑨櫛齒文+⑩連珠文+⑪C字唐草文+⑫無文様となる。光芒は圏線を越えず、圏線は単線表現。文様は丁寧で細密な表現が多く見られる。遊旗文は麻江型では通常の形をとる。典型鼓は麻江型全体に占める割合は比較的大きく、製作された期間も長かったと推測される。ウィーン1号銅鼓の文様配列を踏襲して製作を続けた理由としては文様の配置が美しく、理想形として繰り返し製作するに相応しいと考えられたためであろう。

「十二支鼓」(挿図14 k・l)

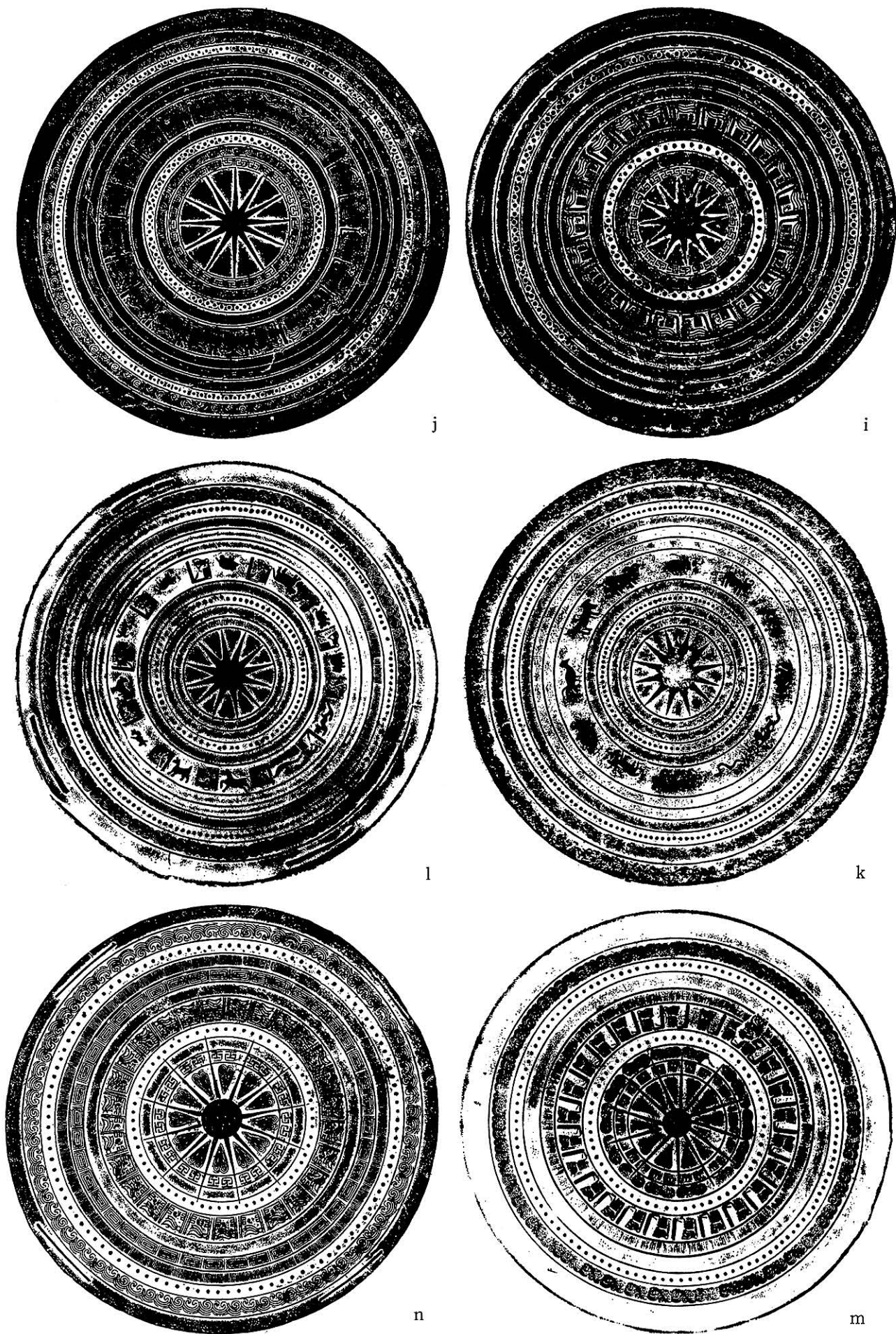
前記八例には含まれなかったが、鼓面の主文様として遊旗文とともに、あるいは遊旗文に代わって十二支の動物文を入れる銅鼓が存在する。掲げた二点は比較的表现が明瞭で十二支の配列も正確である。典型鼓の段階に現れ、時代が降ると動物の種類が減って「丑」だけになる場合もあるようである。十二支鼓の大多数は光芒が圏線を越えない短光芒の太陽文であり長光芒のグループとは一線を画しているらしい。新しい時期と考えるものには「珠文三列」が見られる。十二支鼓はひとつの流派というよりは麻江型の変遷の中で「時おり十二支の文様が採用される場合もある」というような結果の現れとみるべきであろう。しかしながらその特徴は明瞭であり、名前を付けて区分することに問題は無い。

「長光芒鼓」(挿図14 m・n)

大阪個人銅鼓(D)を代表とするもので、中心光芒が第2・3帯にまで延びるものである。珠文列は二帯が原則で「珠文三列」のグループとは異なる。単位文様は典型鼓に類似するが、やや退化簡略化したものをみる場合もある。例えばnの場合、第5帯の遊旗文の形骸化が進み、第10帯のC字唐草文が簡略となり、典型鼓では鼓面に使われない重格文が第7帯に用いられていることなどである。

文様構成では典型鼓より少ない11あるいは10帯構成をとるものが多い。ただし鼓面文様帯の中間に1帯だけが空白の無文様帯を残す点は伝統の名残を示しており典型鼓から大きくは離れていないことを示唆している。

光芒が長く伸びて第2・3帯に達する銅鼓には次に述べる「長光芒龍文鼓」のグループもある。さらに今回検討しなかったが鼓面裏側つまり内面に村落風景などを稚拙な線描きで表現した「長光芒内



挿図14 麻江型銅鼓の諸類型(1) 縮尺不同

面絵面鼓²⁰」も長光芒であり、加えて珠文三列である。

「長光芒龍文鼓」(挿図15 o・p)

麻江型の中でも文様が特徴的で、まとまりの強い一群である。四頭の大龍文を配し、スタンプによって「萬代進宝」「永世家財」「福如東海」「壽比南山」などの吉祥句や「道光□年建立」などの年号が入れられる。「道光」の年号は一九世紀、清の宣宗代(一八二一―一八五〇)にあたっており、pの「道光八年建立」は一八二八年になる。長光芒である点は先述の「長光芒鼓」と共通して中心付近の雰囲気も良く似ている。しかしこの「長光芒龍文鼓」では遊旗文は変形するか消滅している。また他の単位文様も典型鼓からの乖離が著しい。さらに多くは珠文列を三帯巡らせていて「珠文三列」のグループにも近いことが分かる。また文様帯を区分する圏線が従来の単線ではなく二重線になっている例があり、新しい要素の出現と見ることができる。龍文や銘文のスタンプは特徴的であり、異なる銅鼓に全く同一の文様や銘文がみられることから同一工房で生産された銅鼓群であると推測される。この「長光芒龍文鼓」は製作年代が明らかでない麻江型銅鼓として注目すべき一群である。

「龍文魚文鼓」(挿図15 q)

長光芒龍文鼓よりもさらに文様の変形が著しい。拓本は広西省博三一〇号鼓である。光芒は圏線を越えないが、区画線が二重あるいは三重になっている。珠文列は三帯。文様の配列には典型鼓の面影は見られない。同一区画に複数の文様を入れるのは古い段階には無かった。施文原則からの逸脱も著しい。ウィーン2号鼓もこの龍文魚文鼓であり、同一のスタンプ原体が使用されている。

「珠文三列鼓」(挿図15 r)

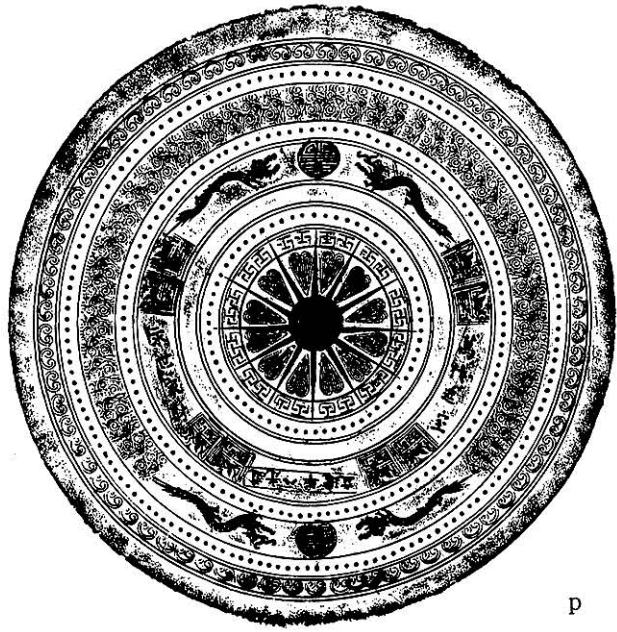
前記の長光芒龍文鼓も龍文魚文鼓も大きくは「珠文三列」のグループに入ることは前の挿図14と比較すれば明らかである。ここで「珠文三列鼓」としたものは龍文や手描きといった特徴をもたない普通の銅鼓の呼び名である。前記の東大教養学部銅鼓(E)や南山大学銅鼓(F)を代表とする。rとした銅鼓では外側の文様帯に遊旗文から離れていった記号のようになった文様が用いられている。また入り組み工字文も外縁に近い位置にまで移動し、傾いて押捺されている。さらに文様帯を区画する圏線は二重または三重になっている。これらは東大教養鼓や南山大学鼓よりもいっそう新しい傾向にあることを示している。この「珠文三列鼓」に共通する特徴は中心部が円盤状に円く、比較的大きめであることである。

「珠文三列手描き鼓」(挿図15 s)

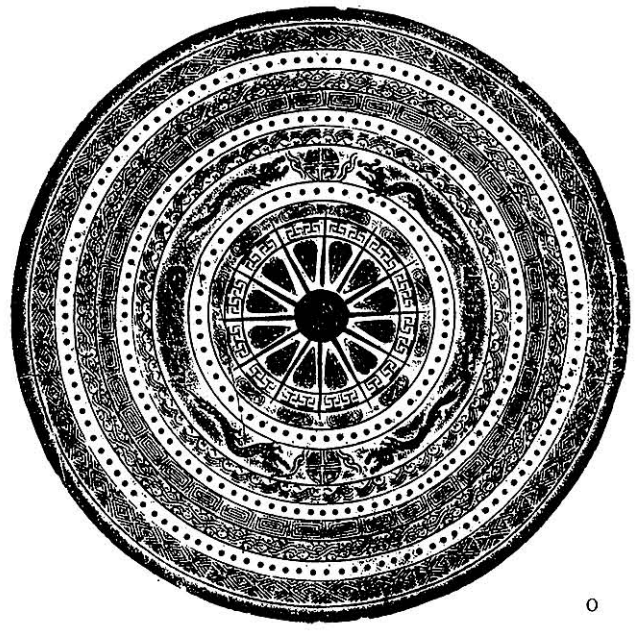
珠文三列鼓に含まれるものだが、文様の多くが篋のようなもので丁寧な外型に手描きしたものからなっている。スタンプは珠文や重格文だけで、唐草文や波形文、外縁部の馬・犬・梅花の図像は手で描かれたものである。この銅鼓の側面にも篋による馬図や牛耕図などが描かれている。手描きで具象的な図像を表した麻江型銅鼓はごく少数だが見た目が面白いので図録などには掲載されやすいようである。文様や図像を手で描くのはスタンプ押捺に比べ効率的ではないが、退化した幾何学文様を意味も分からず作り続けるよりはむしろ面白い作業であつたらう。ウィーン1号鼓を始祖とする麻江型の文様配置からは遠く離れた非常に新しい段階の製品とみなされる。

「手描き鼓」(挿図15 t)

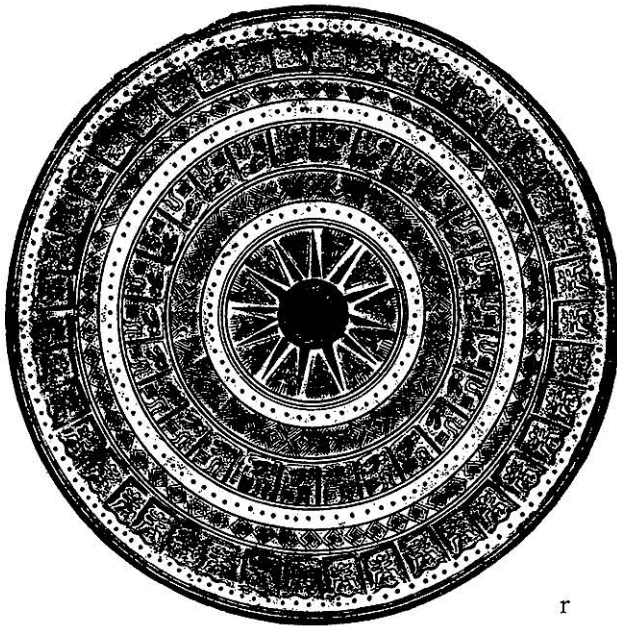
一見珠文二列のようだが第5帯の重圏文を珠文と見れば三列となる。文様を手だけで描いており表現は大変稚拙である。



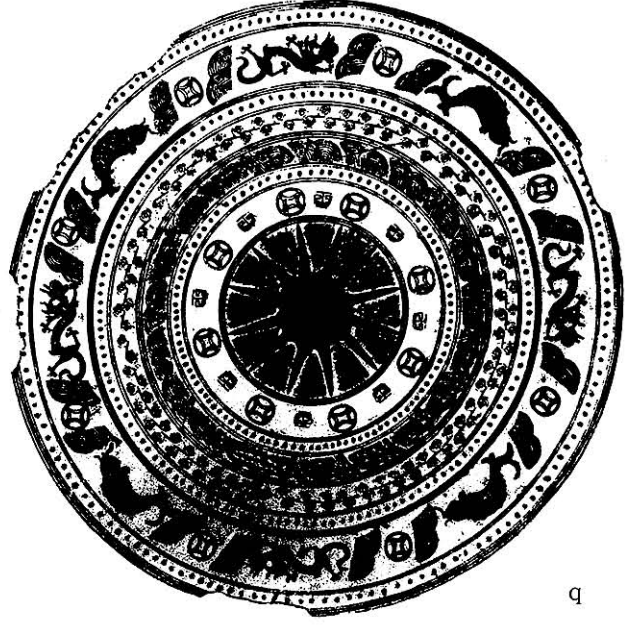
p



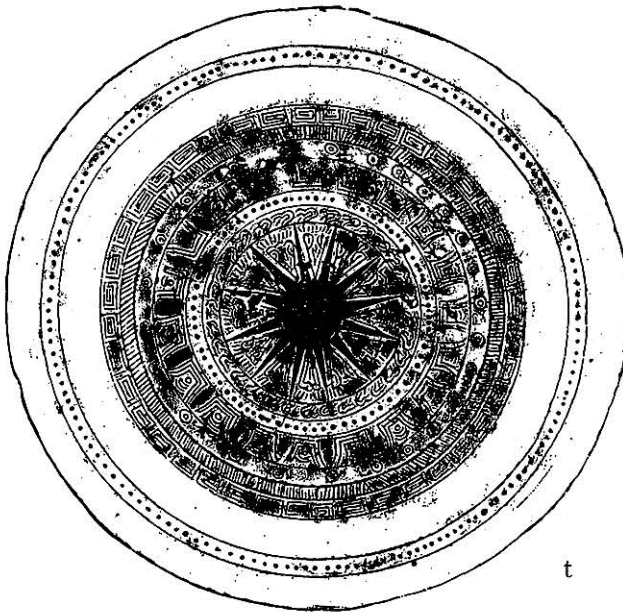
o



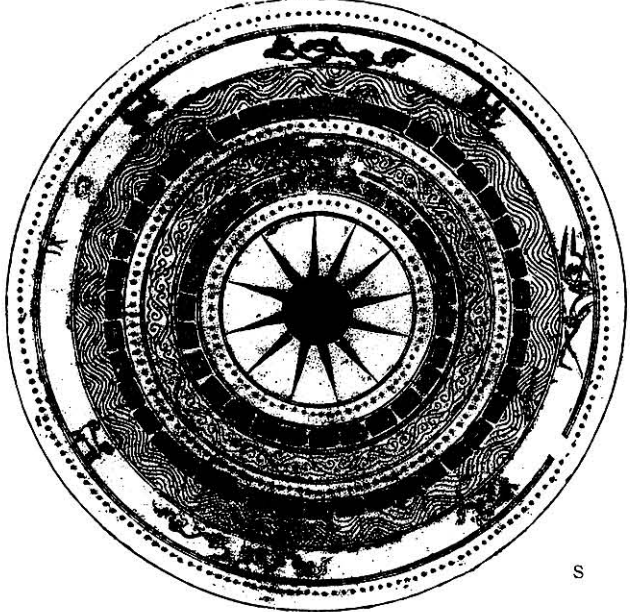
r



q



t



s

挿図15 麻江型銅鼓の諸類型(2) 縮尺不同

六、麻江型銅鼓の諸要素に見られる新古関係

以上のように麻江型銅鼓の文様と形状を検討してみると個々の要素の中に相対的に古いと考えられるものと新しいと考えられるものがあることが明らかとなってきた。個別の資料の説明のなかでも触れてきたことであるが、改めてその個々の要素の新古を示す特徴を整理し列挙してみたい。

ア、銅鼓鼓面の直径が四五センチに近付いた比較的小さなものは新しい。ただし面径が五〇センチに近い大きいものだからといって必ずしも古いとは限らない。

イ、側面の稜の位置が中程にあるものが通常で、それより低いものは極めて古いものか、特殊な系譜の銅鼓である。

ウ、把手の文様が丁寧なものは古く、簡素なものは新しい。

エ、ウイーン1号鼓を始祖とする典型的な文様配列を守るものが古く、徐々に変様を見せるものが中程に、典型的な文様配列を忘れ自由な配置を見せるものが新しい。その内容は以下に記す。

オ、文様のほとんどをスタンプで押捺したものが古く、篋による手描きが混在したり、全て手描きとなったものは新しい。

カ、長光芒の太陽文は短光芒（典型鼓）の後に現れるが、すべての短光芒が長光芒より古いわけではない。

キ、鳥頭文では尻飾りとして細かい櫛歯文を付けたものが非常に古く、通常は単に水滴形を並列しただけとなる。また特殊な形状のもの（r・t）が現れるのは変遷末期のことであろう。

ク、入り組み工字文はウイーン1号鼓の連続文様を先祖とするの

で個々に独立して押されたものはウイーン1号鼓よりも新しい。また第2帯に施されるのが原則なのでそれを守らないものは新しい。

ケ、Z字・C字の唐草文は細密で丁寧なものが古く、新しくなると簡略化する。また模倣が難しいので遊旗文などの目立つ文様よりも早く消滅する。

コ、遊旗文はウイーン1号鼓のような定型的なものが古く、簡略化したもの（南山大銅鼓）や記号化したもの（p・r・t）は新しい。また使用していないもの（o・q・s）も新しい。

ク、鼓面のなかばに無文様帯を持つものは典型鼓に近いので古い。また無文様帯を持たずに全てに文様を埋めたものは新しい。

チ、文様帯はひとつの単位文様を反復施文するのが原則であるので、ひとつの文様帯に複数の文様を混在させるものは新しい。

ツ、十二支鼓の場合文様が正確に十二支を表現したものが古く、動物文が正しく配置されなかったり種類が少ないものは新しい。

テ、龍文や漢字銘文を入れるものは新しいと見られる。

ト、鼓面の珠文列は二列であるもの（第4・10帯）が基本型で、珠文三列となったものは新しい。ただし二列のものに新しいものがないわけではないようである。

ナ、文様帯を区画する圏線はすべて単線であるものが基本で、圏線が二重であったり三重であったりするのは新しい傾向にある。

ニ、文様帯の数が基本型では12帯であるが、時間の経過にしたがって減少し、11帯〜8帯程になる。

ヌ、側面の文様は胸部と足部の二段に別れているのが通常であったが、三段（辰馬1号銅鼓・ウイーン1号銅鼓）や多段（高知個人銅鼓）のものは特別に古いものか、特殊な系譜のものともみられる。

七、麻江型諸類型の系譜

ここでは現在考えられる麻江型銅鼓諸類型の変遷と展開についてその大枠を示してみたい。

麻江型銅鼓を日本国内の実物と中国の研究書・図録等に掲載されたもの、さらにヘーゲルが挙げた写真などを比較検討した結果、辰馬考古資料館が所蔵する銅鼓のひとつ（辰馬1号・A）が大変特殊であることが分かった。この辰馬1号銅鼓をどう評価するかは麻江型銅鼓の成立を考えるうえで避けて通れない問題である。筆者はこれを麻江型の始祖としたウイーン1号銅鼓（B）より前に作られたものと考え、この文様配置をもとに再整理されたものがウイーン1号銅鼓から典型鼓へと続く文様となったと考えている。麻江型銅鼓の成立過程については明確ではないのだが、先行する諸型式（冷水冲型・遵義型など）の中から文様要素を受け継ぎながら、試作的な銅鼓として辰馬1号銅鼓あるいは広西省博物館二二九号銅鼓などが製作されたのではなからうか。辰馬1号鼓はそのサイズや形状は先行する遵義型には属さず、麻江型の法量に含まれる。

ウイーン1号銅鼓は辰馬1号銅鼓よりも側面の稜の位置が上昇しており新しいとみなされる。そしてその文様はその他の大多数の麻江型銅鼓のお手本となった基本形状と配列をもっている。ウイーン1号鼓は麻江型の「始祖」の位置にあると言えよう。そしてその後には挿図14のiの四川大学歴史博物館鼓が製作されたらしい。両者は文様要素はほぼ共通するが第2帯の入り組み工字文の扱いがiの方が確実に新しい。

その四川大学鼓や辰馬2号鼓（C）などは「典型鼓」としてウイーン1号鼓に後続して製作された。その文様内容はまさに典型的であり、文様の配列や形状をよく守っている。この典型鼓が製作されている時期に例えば「長光芒龍文鼓」が同時に製作されていると考えることは困難である。その他の諸類型は文様の退化や規範の逸脱など、この典型鼓より時間的に降るものであることは明白である。典型鼓に引き続いてどの類型の銅鼓が製作されたのかの判断は難しい。「十二支鼓」は流派をなすものではなく典型鼓の途中に現れ、時折文様として十二支が用いられたという銅鼓であろう。

典型鼓に近いものとしては「長光芒鼓」と「珠文三列鼓」の古いものがあげられる。前者は大阪個人蔵銅鼓（D）、後者は東大教養学部銅鼓（E）を代表とする。両者は文様の細部形状の退化の程度がほぼ同様であり、側面の文様配置もよく似ている。「長光芒鼓」は典型鼓の文様を一部簡略にしているが、光芒を長くした以外は内容の変化は少ない。この「長光芒鼓」の生産はその遺存する数の多さからかなり多量だったとみられる。一方、「珠文三列鼓」は典型鼓に近いものから時間的に離れたと見られるもの（南山大学銅鼓（F）や挿図15E）まであって製作の時間幅が広がったようでありその数量もまた多い。「長光芒鼓」と「珠文三列鼓」は典型鼓を引き継ぐ形で、ある時期に分裂した二つの大きな流派だったのであろう。「長光芒鼓」の延長上に「長光芒龍文鼓」は位置付けられるであろう。中心部付近の文様は「長光芒鼓」に近似するが、基本的に珠文三列であり、文様の簡略化・変容が進んでいる。珠文三列の採用は別系譜であった「珠文三列鼓」の系譜に長光芒の新しい段階が飲み込まれたかたちなのであろう。「内面絵画鼓」も長光芒十珠文三

列なのでこのあたりに位置付けられるだろう。

「龍文魚文鼓」は類例は少ないが「長光芒龍文鼓」が存在した後
に現れたものであろう。長光芒ではなくなるが、文様の過剰化が進
んでいて、より新しい傾向を示している。

「珠文三列手描き鼓」は珠文三列鼓の末流に置けるであろう。ス
タンブ文以外に唐草文や波形文などを鑄型に範描きしたもので、

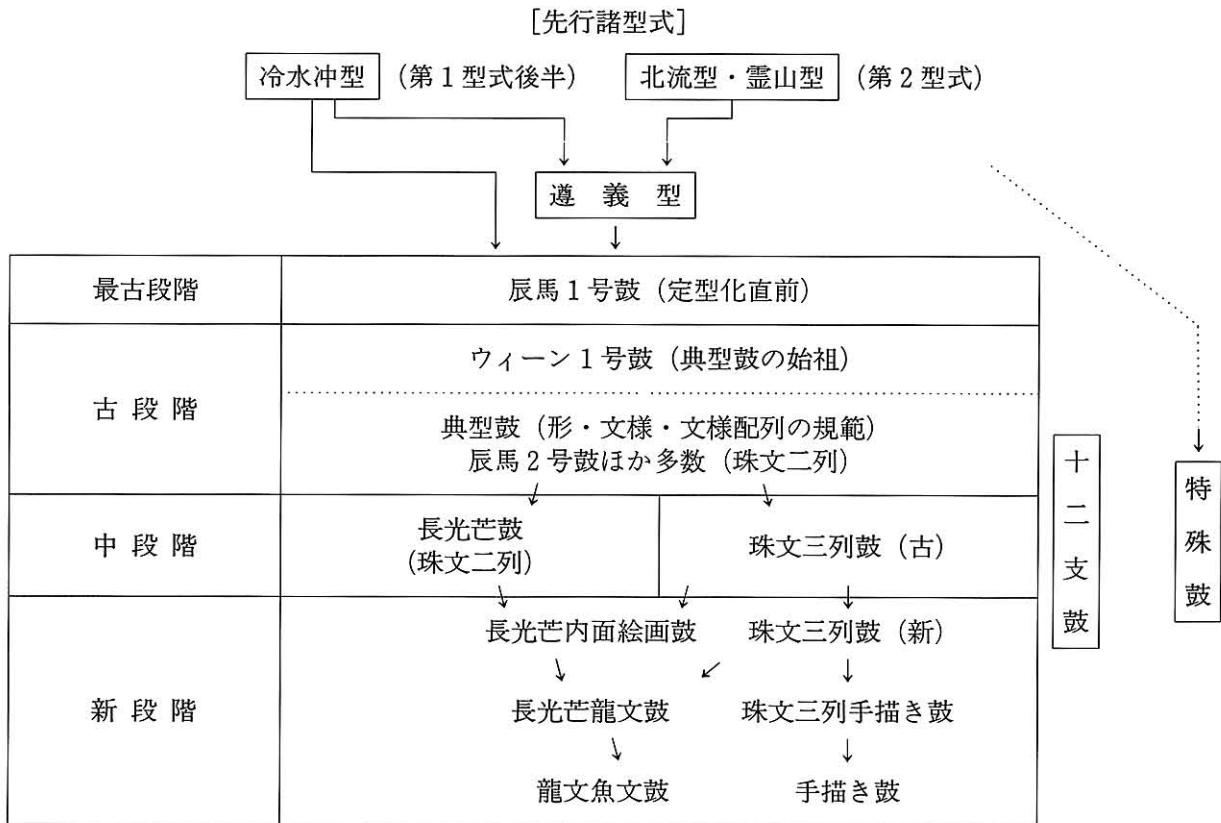
「手描き鼓」はさらにほとんどの文様を範描きしたもので、その
うえ表現は稚拙である。特別な工房あるいは非常に新しいことを示
しているであろう。珠文三列の末裔か。

「特殊鼓」は類型分けには記述しなかったが、高知個人蔵銅鼓
(G) を代表とするものである。類例は広西省博物館図録二五八番
のそれである。これらは通常の麻江型ではみられないほど側面の稜
の位置が低く、一見古そうではある。また文様も変わったものであ
る。筆者の考える麻江型銅鼓の変遷はウィーン1号鼓を始祖とし、
その子孫たちの展開であると述べてきたが、この「特殊鼓」だけは
その流れに乗っていない。この一群の銅鼓はまったく系統を別にし、
文様を古い銅鼓に求めて製作されたグループなのであろう。時代的
には文様の退化具合から麻江型本流の中間くらいの段階に並行して
いるものであろう。今後とも注意をはらうべき銅鼓群である。

「その他の銅鼓」

以上の区分にあてはまらないものも少数存在する。文様の退化し
たものは時期の降るものであろう。

下段の挿図16は筆者が推定した麻江型銅鼓諸類型の系譜関係を図
示したものである。



挿図16 麻江型諸類型の系譜 (推定)

八、麻江型銅鼓變遷の段階設定

麻江型銅鼓諸類型の系譜関係は、大きく次の四段階にまとめとらえた方が理解が容易であろう。

最古段階—辰馬1号鼓を代表とするもので定型化直前の麻江型最新期の銅鼓を指す。類例は広西省博物館二二九号鼓など数はごく少ない。

古段階—ウイン1号鼓を筆頭とした「典型鼓」の一群。麻江型銅鼓の形と文様と配列の規範をよく守っているものである。類例は比較的多い。「十二支鼓」の一部含。

中段階—「長光芒鼓」と「珠文三列鼓(古)」。典型鼓の文様規範からはやや離れつつあるが、さほどは遠くないもの。数量は比較的多い。

新段階—「長光芒龍文鼓」「龍文魚文鼓」「珠文三列鼓(新)」「珠文三列手描き鼓」「手描き鼓」。典型鼓の文様規範からは遠く離れているもの。鼓面の圏線が二重・三重になったものが多い。数量は多い。

九、紀年銘銅鼓と麻江型の製作年代

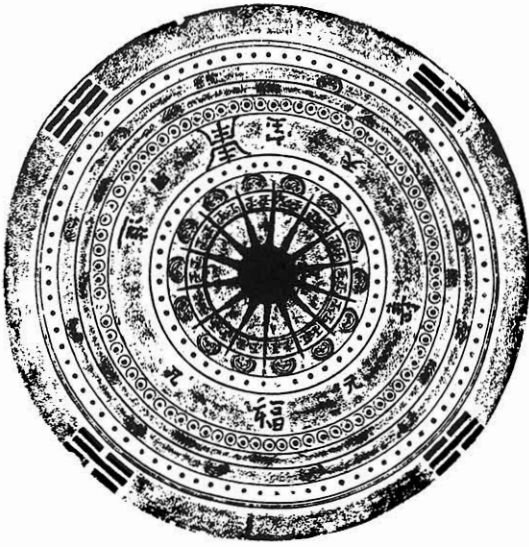
麻江型銅鼓がいつ頃製作されたのかを正確に答えることはその根拠の乏しさから困難を伴う。中国古代銅鼓研究会が『中国古代銅鼓』(一九八八年)で示した年代観²¹によれば、先行する遵義型銅鼓が共伴遺物や副葬された墓主の没年あるいは北宋銭を鑄造に用いてい

る点などから唐代から宋代にかけての製品とされ、それに後続する麻江型銅鼓は南宋末(十三世紀後半)から清代末頃(十九世紀)の間、約六百年余りにわたって生産されたとしている。

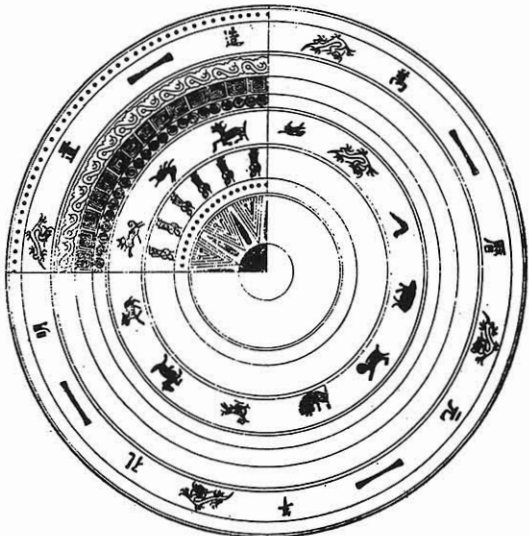
以下では示してきた変遷観を基に紀年銘銅鼓を検討してみたい。中国の研究者は紀年銘資料に依拠して編年を組立てているのだが、筆者の考えている変遷観とは齟齬をきたす部分があり注意される。

まず古い例として挙げられる広西省博物館〇六五号鼓(挿図17)は鼓面に漢字の篋描き銘文(陽鑄)を持っている。それは「福壽進宝」と「天元孔明」の二種類である。蔣廷淪²²はこの銅鼓の「天元」を元の末裔の年号、西暦一三七八―一三八七年と考え、銅鼓もそのころの製品と示唆している。しかしながらこの銅鼓は筆者の考える麻江型新段階に属するもので、とても十四世紀に置くことはできない。長光芒で珠文は三列、圏線に二重線を含み、なおかつ銘文の「福壽進宝」は「長光芒龍文鼓」によく用いられたものである。新段階でも新しい傾向をもつ銅鼓とすることができよう。この銅鼓の「天元」は年号とすることはできないであろう。

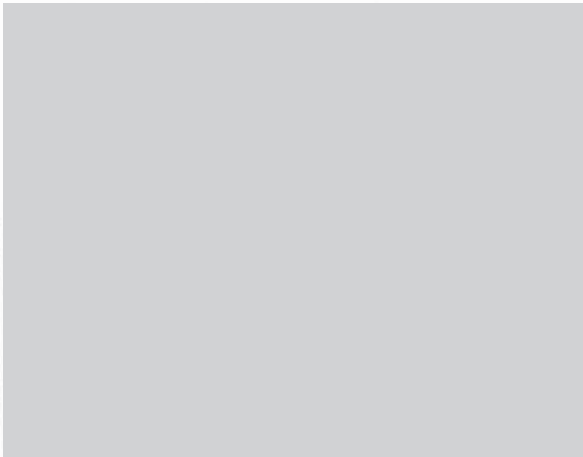
次に広西省佛山市博物館が所蔵する粵一六四(新三四)号鼓²³には「成化十五年」の銘が鑄出されているという。拓本は掲載されていないが比較的鮮明な図版(挿図19)を観察すると一見古段階の典型鼓に近い雰囲気をもっているものの、珠文列が二列ではあるが「珠文三列鼓」の配置に近い文様構成と見られる。太陽文の中心が円盤状になっていることもそれを示す。筆者の分類で中段階の「珠文三列鼓」の古い頃のものか。「成化十五年」は明の憲宗代、西暦一四七九年にあたる。中段階の古い方が十五世紀後半ということならば妥当なところであろうか。



挿図17 「天元孔明」鼓、広西省博65号



挿図18 「萬曆元年」鼓、1925号



挿図19 「成化十五年」鼓、粵164号

問題は貴州省興義収集のB1・一九二五号鼓(挿図18)である。鼓面文様帯のなかばに十二支を表した「十二支鼓」に含まれる。銘文は鼓面外縁近くに鑄出されたもので「萬曆元年孔明置造」の八文字が見られる。萬曆元年は明の神宗代、西暦一五七三年にあたる。筆者はこの銅鼓の年号にも否定的である。それは鼓面の文様が典型鼓からは遠くはなれた新段階のものだからである。鼓面に人物像を入れることや圏線が二重線になっていること、珠文三列鼓の系統であること、側面の文様が遊旗文を記号化したような非常に新しいものであること、十二支の配列が正しくないことなどである。「孔明置造」はもちろん吉祥句であり、「萬曆元年」も古い年号を選んで入れたのではなからうか。先に否定した「天元孔明」とも通ずる銘文であり、両方とも清代後半に製作されたものと考えておきたい。雲南省昆明市収集の丁式三号鼓は「珠文三列手描き鼓」に含まれ、

筆者の考えでは新段階の新しい傾向としていえるものである。この丁式三号鼓の鼓面には「康熙二十一年歲在壬戌孟春造鑄」と鑄出された銘文がある。康熙二十一年は清の聖宗の年号で西暦一六八二年にあたる。この銅鼓の銘文をどう考えるかは難しい。文様の退化は著しいので非常に新しくしたいところだが、銘文には問題がないようである。この位置付けは次の「長光芒龍文鼓」評価にも係わってくる。本稿ではこの「康熙二十一年」銅鼓については評価を保留しておきたい。

最も紀年銘が信用できるのは新段階の「長光芒龍文鼓」のグループである。挿図15のPの銅鼓では「道光八年建立」の文字が鑄出されていて、清の宣宗代、西暦一八二八年の製作であることはほぼ間違いない。このグループの銅鼓では他に「道光十二年建立」や「道光□年建立」の銘文が多数見られ、清代の十九世紀前半ごろにま

まっして製作された一群であることが分かる。

麻江型銅鼓では銘文を入れないのが普通であり、特に古段階のものには全く見られなかった。中段階の一角が十五世紀後半にあり、新段階の一角が十九世紀前半とすると古段階は十三〜十四世紀に入るのであろうか。中国の研究者の年代観の範囲内にあるらしい。

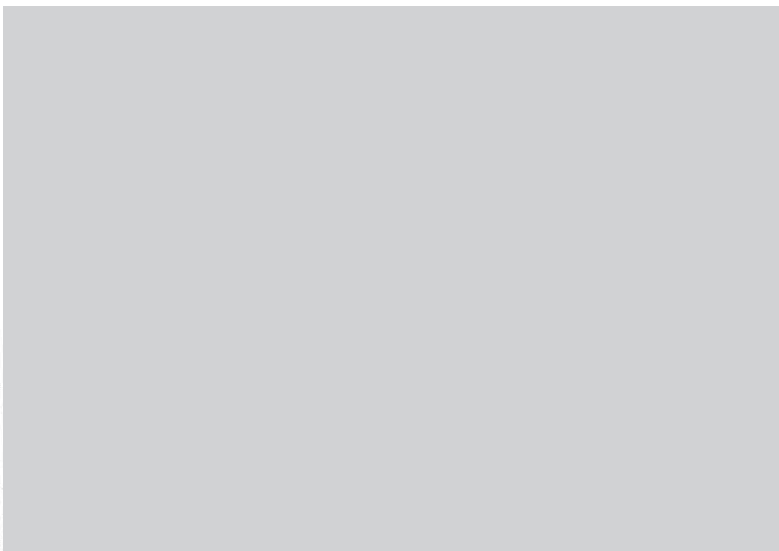
一〇、麻江型銅鼓研究の展望

これまでは実際の資料に即してその形状や文様から麻江型銅鼓の新古関係の追究を行ってきたが、以下ではこの研究がもたらす銅鼓研究の展望について述べてみたい。

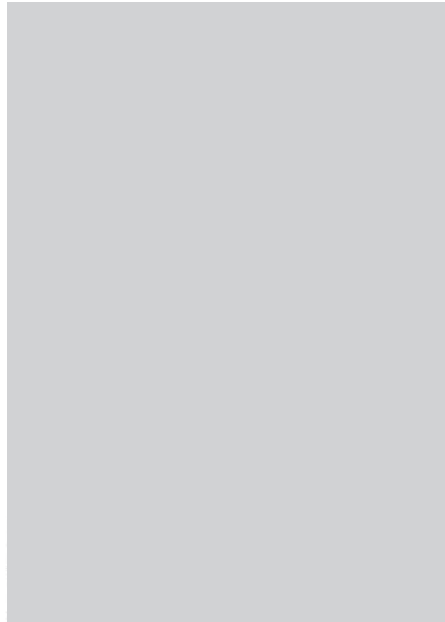
麻江型銅鼓が具体的にどのような祭りに用いられていたのか、あるいは現在どのように用いられているのかは、中国の考古学研究者や日本の民族学・文化人類学の研究者によって個別事例が報告されているので詳しくはそちらを参照していただきたい。²⁷

まず中国南部の山岳民族のうち壮族や苗族・水族や侗族など異なる民族で麻江型銅鼓が使用されているのだが、各民族あるいは集落毎に銅鼓諸類型の差があるのかどうかという問題である。これに関しては本稿のような銅鼓の類型区分の意識が調査者には無く、単に麻江型銅鼓を使用していたという報告で終わっている場合が普通であるのでそこからは必要な情報は得られない。今後はどの類型がどの地域に分布しているのかを調査していく必要がある。その成果は麻江型銅鼓の研究課題だけに留まらず中国南部の山岳民族の歴史²⁸の解明にも貢献するはずである。

麻江型銅鼓の生産地²⁹に関しても資料を観察する限りでは古段階は



挿図21 広西省壮族青蛙節
（「广西銅鼓図録」152頁より）



挿図20 貴州省水族過端節
（「广西銅鼓図録」153頁より）

比較的少数であつたらしいが、時期が下るにつれて類型の流れを増やしていることから、生産地すなわち生産工房が地理的に拡散していったと想像される。また銅鼓生産自体は清代末頃まで行われていたとされるので、あるいは現在でもその工房の跡や生産遺跡を確認することは可能なのではなからうか。古段階の銅鼓は古い銅鼓の伝統のうえにかなり保守的な生産を重ねていたようだが、新段階には漢字の吉祥句を入れたり、漢族的な文様に置き変わったりとその性格に変化が見られる。銅鼓生産の拡散には製作工人が少数民族から漢族へ拡大したのか、あるいは銅鼓工房の所在地域が漢族の政治的・文化的影響を強く受けるようになった結果なのであろう。

麻江型銅鼓の使用例の文献を読むと、しばしば銅鼓には雌雄の二種類があり音程に高低の差があることや、その売買価格に差があるというような記述を目にすることがある。麻江型銅鼓の雌・雄とはどのような差異なのだろうか。例えば同じ文様を持つが面径に五センチほどの大小の差がある銅鼓のようなものであろうか。現在観察したものの中から文様や外見に二個一対になるような銅鼓を見いだすことはできなかった。銅鼓使用例を写真などで見ると一個だけあるいは四個、あるいは多数で叩いているものはよく見かけるが二個一対が通例ということは無いようである。この問題は現在の研究段階では未解明な部分と言えよう。

麻江型銅鼓の所有形態だが、古い冷水冲型や靈山型・北流型などは面径七〇―一〇〇センチに達する大型のもので、ひとりの力では移動できないような重量である。それに対して麻江型銅鼓は把手に縄を通して背負って運ぶ写真があるように、重量が十―十五キログラムと担げる重さと大きさである。このことは先行する諸型式の銅

鼓が村落所有の共同体の祭器であるのに対して、麻江型銅鼓は家族あるいは個人単位の所有形態なのではないかと想像させる。麻江型銅鼓の成立の契機に所有形態の転換を含む大きな祭儀の変質が想定されるとともに麻江型銅鼓生産の全期間を通じてほぼ一定の法量を守る背景にはこの銅鼓のもつある特性があつたためと推測されるのである。

一一、おわりに

本稿では主に麻江型銅鼓の形態と文様の観察からその系譜関係と新古関係の追究を行ってきた。筆者は日本国内所在の銅鼓の観察を主としたために類型区分などに見落としがある可能性は否定できないが、ある程度おおまかな時間的変遷と流派を描き出すことができたと考えている。また個別の銅鼓のどこをどのように観察すべきかは記述のなかで折りに触れて述べてきたとおりである。

麻江型銅鼓は銅鼓全体の変遷からみれば非常に新しい段階の一群ではあるが、検討の結果、銅鼓の文法が連綿と伝えられていることが明らかに出来たと考える。二千年以上前の石寨山型銅鼓の時代とは現在の銅鼓祭儀は変質してはいるだろうが、それでもなお銅鼓が使用され続けている事実には改めて驚かされるのである。

〈註〉

- 1 Franz Heger ALTE METALLTROMMELN AUS SÜDOST-ASIEN. 1902 LEIPZIG

- 2 中国古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』文物出版社 一九八八年 北京

- 3 註2文献、六四〜八四頁。
- 4 清野謙次『日本考古学史・人類学史 上巻』一九五四年に掲載された志賀理斎筆『なかなかの友』掲載の宮川候所蔵品の図(典型鼓)。
- 5 本稿で紹介した日本国内所在麻江型銅鼓七点以外に次の場所に存在する。東京国立博物館所蔵麻江型銅鼓四点。東京芸術大学資料館所蔵麻江型銅鼓一点(典型鼓)。国学院大学考古学資料室所蔵麻江型銅鼓一点。耕三寺博物館所蔵麻江型銅鼓一点(典型鼓)。それ以外に古い図録などで存在は知られているが現所在地不明銅鼓や個人蔵銅鼓が存在する。
- 6 鳥居龍藏『苗族調査報告』一九〇七年。鳥居龍藏が貴州省貴陽で収集した銅鼓は行方不明(亡失)だが、丁寧な観察と記録が行われておりその内容はよく分かる。面径五〇・〇センチ。「典型鼓」である。
- 7 中山平次郎『福岡平岡家珍蔵の古銅鼓』『考古学雑誌』第六卷第二号一九一五年。面径四七・三センチ。「珠文三列鼓(古)」である。
- 8 中山平次郎『古銅鼓研究の新材料』『考古学雑誌』第六卷第三号一九一五年。面径四四・八センチ。「珠文三列鼓(新)」である。
- 9 直良信夫「本邦所在銅鼓の一資料」『考古学雑誌』第一八卷第一号一九二八年。面径五〇・〇センチ。「典型(十二支)鼓」である。
- 10 石神怡「鐸・鼓のまじわり」大阪府立弥生文化博物館平成二二年秋季特別展『卑弥呼の音楽会』図録 二〇〇〇年。
- 11 宮川禎一「施文技術からみた西盟型銅鼓の新古」『学叢』二十二号 京都国立博物館 二〇〇〇年。
- 12 第三型式(西盟型)銅鼓はその多くが失蠟法で铸造されている。文様は蠟原型にスタンプで押されるため製品でも文様は凹になっている。註10文献参照。
- 13 辰馬考古資料館の銅鼓二点についての詳しい観察と記述は、宮川禎一「辰馬考古資料館所蔵の銅鼓」『辰馬考古資料館考古学研究紀要4』二〇〇一年、に記載している。そちらを参照されたい。
- 14 註1文献。ヘーガーはこの著書で各銅鼓の単位文様を抜き出して集成しており、文様変化の方向性まで示唆している。
- 聞宥『古銅鼓図録』一九五七年、掲載の第四十二図銅鼓第二十六である。挿図14のi。
- 15 浅川滋男「中国・貴州の高床住居と集落―黔东南のトン族とその周辺―」『住宅建築』一九九〇年―四の九〇頁。
- 16 雲南省博物館編『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』一九五九年 北京図版一一九の銅鼓形双蓋銅貯貝器第一層器蓋羽人紋拓片の一部。
- 17 慶応大学所蔵銅鼓(冷水冲型)の鼓面拓本の一部。註10文献より。
- 18 東京都浅草太鼓館所蔵銅鼓(西盟型B類)の鼓面拓本の一部。註10文献より。
- 19 挿図14・15の銅鼓の出典と面径を列記する。
- i、聞宥編著『古銅鼓図録』第四十二図、銅鼓第二十六。四川大学歴史博物館所蔵。面径五〇センチ。第7・8・9帯に色漆塗り。
- j、聞宥編著『古銅鼓図録』第四十図、銅鼓第二十五。貴陽個人蔵。面径四九センチ。
- k、聞宥編著『古銅鼓図録』第三十二図、銅鼓第十九。潘景鄭所蔵拓本。面径五〇センチ。
- l、広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』二二三号鼓。広西省柳州収集。面径五十七センチ。
- m、広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』〇二二号鼓。広西省都安県。面径四七センチ。
- n、聞宥編著『古銅鼓図録』第四十三図、銅鼓第二十七。四川大学歴史博物館所蔵。面径四九・九センチ。
- o、聞宥編著『古銅鼓図録』第四十九図、銅鼓第三十二。四川省博物館所蔵。面径四九・七センチ。
- p、広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』〇六三号鼓。広西省河池地区。面径四七センチ。
- q、広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』三一〇号鼓。広西省東蘭県。面径四八・三センチ。
- r、聞宥編著『古銅鼓図録』第三十八図、銅鼓第二十三。四川大学歴史博物館所蔵。面径四七センチ。
- s、広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』百色七号鼓。広西省西林県。面径四七・五センチ。
- t、広西壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』二九四号鼓。広西省柳州収集。面径四九・八センチ。

20

銅鼓の鼓面内側に村落風景などを稚拙な線で表現した「内面絵画鼓」はそのユニークな内容から比較的よく取り上げられる。絵画の内容は樹木・建物・穀倉・池・耕作風景・農具・騎馬図・人物図などで巧拙はあるもののモチーフや配列が一定であり村落生活風景図と呼べるものである。当然ひとつの類型をなし、近接した時期に連続的に製作された銅鼓であろう。鼓面文様は特徴的で、通常の長光芒は第3帯までであるが、内面絵画鼓では芒端が第4帯にまで伸びている。これは光芒自体が長いというよりは圏線が第1帯の鳥頭文を切るように内側に一本多いためといえる。内面絵画の間に銘文をもつもの（広西省銅鼓図録〇七八号）があり、「万宝家財」「孔明将君」「孔明鼓」などが見られるので「長光芒龍文鼓」に近い新段階の銅鼓の一群と言えよう。なお把手が普通より多い六本もつものがあるのも「内面絵画鼓」の特徴のひとつである。

21 註2文献の一六〇―一七頁。

22 広西省壮族自治区博物館編『広西銅鼓図録』一九九一年 北京。

この図録の一三一頁に掲載されている〇六五号鼓。

23 蔣廷瑜『銅鼓芸術研究』一九八八年 南寧。二四二頁。

24 註2文献。六九頁と彩版二の2。

25 註2文献。七一―七四頁と図版六九の1。

26 註2文献。七五―七六頁と図版七四の1。

27 代表的な文献としては、鈴木正崇・金丸良子『西南中国の少数民族―貴州省苗族民俗誌―』古今書院 一九八五年、日本ナショナルトラスト編『季刊自然と文化1989春季号「特集」雲南・貴州と古代日本のルーツ』一九八九年、などがある。

28 苗族の歴史については次の文献を参照されたい。

村松一弥「解説」東洋文庫二六〇『苗族民話集 中国の口承文芸2』平凡社 一九七四年。

29 麻江型銅鼓の鑄造技術については触れる余裕がないが、その成分分析値を挙げておこう。註2文献一八二―一九二頁によると麻江型銅鼓では銅が七五―八〇%、錫が一〇―一五%、鉛が〇―一〇%の範囲にあるものが普通といい、比較的鉛分が低く錫分が高い傾向を示すということである。

〈謝辞〉

本稿をなすにあたっては銅鼓御所蔵者である辰馬考古資料館・東京大学教養学部美術博物館・東京大学文学部考古学研究室・南山大学人類学博物館ほか個人の御所蔵者および学芸担当者各位には大変お世話になった。改めて感謝するとともに報告の遅延をお詫びする次第である。